

# 武蔵国分寺跡発掘調査概報

## IX

北方地区・鉄道学園内下水道工事に伴う調査

1985年3月

武蔵国分寺遺跡調査会  
国分寺市教育委員会

## 序

昭和49年に着手された武蔵国分寺跡の広域調査も11年目を迎え、遺跡調査会の当面の目的であった寺域確認調査も、いよいよ昭和60年度をもって一応区切りをつけることになりました。

この間、大・小を含め225次に及ぶ発掘調査を行なってまいりましたが、これらの諸調査によって得られた膨大な調査資料の研究によって、武蔵国分二寺各々の寺域や寺院を構成する附属施設、或いは国分寺の周囲に展開する住居群など、国分寺を構成する遺構の実態が徐々にではありますが明らかにされてきており、これに伴ってこれまでの武蔵国分寺に対するイメージが一新されつつあります。

ところで、このたび環境庁の全国名水百選に現国分寺東側の「お鷹の道・真姿の池湧水群」が選ばれましたが、その選定にあたっては、湧水の中核とする自然環境の保全が地域住民の理解と努力によって成し遂げられていることが高い評価を受けたと聞き及んでおります。この快挙は、将来の武蔵国分寺の保存に明るい見通しを与えるものであり、改めて地元の方々の御努力に心からお礼申し上げる次第です。

今回の調査は、国鉄中央鉄道学園内における下水道工事に伴う調査として実施したものでありますが、今一つははっきりしなかった武蔵国分寺遺跡の北限地域の様相がかなり鮮明になるなど、調査成果は予想を上回るものがあり、ここに報告書として刊行して広く御叱正を乞うものであります。

最後に、発掘調査にあたって終始深い御理解と御協力をいただいた国鉄中央鉄道学園ならびに東京建築工事局の関係者の方々に心から感謝申し上げます。

昭和60年3月31日

調査会会長 星 野 亮 勝

## 例 言

1. 本書は、東京俳園分寺市西元町に所在する武蔵国分寺跡において昭和49年以来実施されている調査の内、日本国有鉄道中央鉄道学園内における下水道工事に伴う調査の成果をまとめたものである。調査に係る費用は、日本国有鉄道が負担した。
2. 調査は、昭和58年3月1日から昭和59年6月15日まで都合5地区にわたって行い、報告書作成作業は昭和60年3月31日まで武蔵国分寺遺跡調査会事務所で行った。  
なお、本調査は武蔵国分寺遺跡調査会の第168・190次調査として実施されたものである。
3. 発掘調査は、有吉重蔵・福田信夫・高林和恵・三木弘が現場を担当した。
4. 本書の執筆・編集は、滝口宏・永峯光一・大川清・坂詰秀一の監修のもとに、三木弘が担当し、有吉重蔵がこれをたすけた。
5. 出土遺物の整理の内、実測・トレース・写真撮影は三木弘・小林幸江・斉藤さだ子が主に行った。遺物図面・図版、遺構図面・図版の作成、清書は、下記の全員があたった。
6. 報告書作成の過程で次の方々の御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げます。(敬称略)  
安孫子昭二・伊藤富士夫・岡崎完樹・史川順一・高林均・谷口康浩・富樫雅彦・西脇俊郎・早川泉・広瀬昭弘・窓ヶ窪遺跡調査会・東京学芸大学附属図書館
7. 発掘ならびに整理作業に参加、協力いただいた方は下記のとおりである。記して感謝の意を表したい。(敬称略)

### 発 掘

井口正利・石岡里志・磯野義孝・井上清司・岩崎洋・江口研一・江連俊和・大元進太郎・岡本芳政・加沢仁・神野浩司・小界俊一・近藤倫明・佐々木正和・沢井進一・沢田徳雄・志賀敦・嶋崎正・下田長夫・鈴木新一・関美男・高岩輝幸・高橋昭彦・竹林裕・田中祥介・中川一昭・中島大順・中村克二・林伸明・松沢昭臣・広瀬柱・森俊和・森山龍爾・渡辺雅昭・

### 整 理

大澤華子・岡ミサオ・小林幸江・小峰ミヨ子・斉藤さだ子・並高限代・塩野由美・鈴木洋子・田中浩身・永沢昭子・村井京子・八高昭枝・

## 凡 例

### 本 文

1. 遺構は、各遺構毎にはば発見順に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於いては、「S1304住居跡」・「SK747土坑」の様に記述した。

SA 櫓跡・柱穴列	SE 井戸跡	SX 特殊遺構
SB 掘立柱建物跡・礎石建物跡	SI 住居跡・工房跡	P 小穴
SD 溝跡・溝状遺構	SK 土坑・瓦溜め	

2. 瓦の部分名称については、佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」(1972『考古学雑誌』58巻2号所収)での名称によった。
3. 瓦の左側端・右側端とは、狭端を上位置にした凹面での左・右を指す。ただし、狭端・広端の不明なものについては、実測図での左・右を指すものとする。

### 図面・図版

#### 1. 遺構

①遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276mに後者がある。また、僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、真北から7°08'03"、磁北から0°38'03"それぞれ西偏する。

②断面図表示の数字は水系レベルで、海拔高を示す。

③ストリートーンの指示は次のとおりである。



④住居平面図に於いて、一点鎖線・二点鎖線は床面が堅固な範囲を示す。

⑤遺物分布図に於ける記号は次のとおりである。▲(土器器坏・塊)、△(土器器甕他)、●(須恵器坏・塊)、○(須恵器甕他)、■(施釉陶器)、□(瓦埴類)、×(鉄・石製品他)なお、図中の数字は、遺物番号(次項③参照)を示す。

⑥縮尺は次のとおり統一したが、一部異なるものがある。

遺構配置図 1/100、住居跡・溝跡・土坑他 1/50、カマド他 1/25

#### 2. 遺物

①土器類に於けるストリートーンの指示は次のとおりである。



②墨書はベタで、朱墨書は網点で表わした。

③写真図版のうち出土遺物は、図面番号と対照にした。例えば、「33-2」とあれば、「図面33-2」のことを指す。

④縮尺は次のとおり統一した。

図面 鉄・石製品他 1/2、土器類 1/3、瓦 1/4、縄文土器・石器 1/3 (小形石器 2/3)

図版 鉄・石製品 1/1、土器類 1/2、瓦 1/4、縄文土器・石器 1/2 (小形石器 1/1)

## 本文目次

序	
例言	
凡例	
I 調査に至る経過	1
II 調査地区の概観	22
1. 調査地区の位置・立地	22
2. 層序	23
III 発掘経過	25
IV 検出遺構	29
住居跡	29
溝跡	32
掘立柱建物跡	36
土坑	37
不明遺構	39
小穴	40
V 出土遺物	50
VI 縄文時代	58
1. 検出遺構	58
2. 出土遺物	64
VII 小結	73

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置 (1/2500) .....	4
第2図	調査区の位置 (1/250) .....	5
第3図	遺構配置図 2・3・5・6・7・8区 (1/100) .....	9
第4図	遺構配置図 10・11・12・13・14・15・16区 (1/100) .....	10
第5図	遺構配置図 17・22・24・25・26区 (1/100) .....	11
第6図	遺構配置図 32・35・37・38・39・41区 (1/100) .....	12
第7図	遺構配置図 42・45・46・57・58・59・61区 (1/100) .....	13
第8図	遺構配置図 63・64・65・66区 (1/100) .....	14
第9図	縄文時代遺構配置図 1・2・4・5・6・7区 (1/100) .....	15
第10図	縄文時代遺構配置図 10・13・17・18・19区 (1/100) .....	16
第11図	縄文時代遺構配置図 20・21・23・27・28・29区 (1/100) .....	17
第12図	縄文時代遺構配置図 30・31・32・33・34・36・40区 (1/100) .....	18
第13図	縄文時代遺構配置図 42・43・44・45・46・47・48・49区 (1/100) .....	19
第14図	縄文時代遺構配置図 53・54・55・56区 (1/100) .....	20
第15図	縄文時代遺構配置図 57・59・60・61・62・67区 (1/100) .....	21
第16図	標準層序 .....	24
第17図	S I 304 住居跡実測図 .....	41
第18図	S I 305 住居跡実測図 .....	42
第19図	S I 305・321 住居跡実測図 .....	43
第20図	S I 321 住居跡実測図 .....	44
第21図	S D 168・169・176 溝跡実測図 .....	45
第22図	S D 170・174 溝跡実測図 .....	46
第23図	S D 175・181・182 溝跡実測図 .....	47
第24図	S B 75・76 掘立柱建物跡、歴史時代土坑実測図 .....	48
第25図	S X 34 不明遺構実測図 .....	49
第26図	S I 304・305 住居跡出土遺物 .....	55
第27図	S I 321 住居跡出土遺物 .....	56
第28図	S I 321 住居跡、S D 168 溝跡、S K 738・739 土坑、遺構外出土遺物 .....	57
第29図	S S 24・25 集石跡、縄文時代土坑 .....	68
第30図	縄文時代土坑 .....	69
第31図	縄文土器 .....	70
第32図	縄文石器 .....	71
第33図	縄文石器 .....	72

## 表 目 次

第1表	発見遺構一覧表 .....	6
-----	---------------	---

第2表	調査工程表(第168次).....	27
第3表	調査工程表(第190次).....	28

## 図版目次

図版1	S I 304 住居跡	1. 全景(北から) 2. 全景(東から)
図版2	S I 304 住居跡	1. カマド断面(南から) 2. カマド全景(南から) 3. 住居跡内小穴断面(北から)
図版3	S I 305 住居跡	1. 全景(西から) 2. 全景(南から)
図版4	S I 305 住居跡	1. 東西土層断面(南から) 2. マウンド状遺構(西から) 3. マウンド状遺構断面(西から)
図版5	S I 321 住居跡	1. 全景(東から) 2. 全景(東から)
図版6	S I 321 住居跡	1. 遺物出土状態(東から) 2. カマド遺物出土状態(西から) 3. カマド全景(西から)
図版7	S D 168・169 溝跡	1. S D 168・169 溝跡(6区)全景(西から) 2. S D 168・169 溝跡(6区)全景(南から)
図版8	S D 168・169 溝跡	1. S D 169 溝跡(6区)東西土層断面(南から) 2. S D 168 溝跡(6区)南北土層断面(東から) 3. S D 168 溝跡(7区)全景(北西から)
図版9	S D 170・176 溝跡	1. S D 176 溝跡全景(西から) 2. S D 170 溝跡全景(西から) 3. S D 170 溝跡南北土層断面(東から)
図版10	S D 174 溝跡	1. S D 174 溝跡(22区)全景(東から) 2. S D 174 溝跡(22区)東西土層断面(南から) 3. S D 174 溝跡(37区)東西土層断面(南から)
図版11	S D 175・182 溝跡	1. S D 175 溝跡全景(北から) 2. S D 182 溝跡(26区)全景(北から) 3. S D 182 溝跡(39区)全景(東から)
図版12	S D 181 溝跡	1. 全景(北から) 2. 東西土層断面(南から) 3. 東西土層断面(北から)
図版13	S B 75・76 掘立柱建物跡, S K 738 土坑	1. S B 75・76 掘立柱建物跡全景(西から) 2. S K 738 土坑全景(北東から)

## 目次

図版14	S K 739・740 土坑	1. S K 739 土坑全景 (南から) 2. S K 739 土坑南北土層断面 (東から) 3. S K 740 土坑全景 (南から)
図版15	S K 744・755・757 土坑	1. S K 744 土坑東西断面 (南から) 2. S K 755 土坑全景 (北から) 3. S K 757 土坑全景 (西から)
図版16	S X 34 不明遺構	1. 50 区東壁土層断面 (西から) 2. 51 区北壁土層断面 (南から) 3. 52 区南壁土層断面 (北から)
図版17	10・12・14 区	1. 10 区全景 (南から) 2. 12 区全景 (南から) 3. 14 区全景 (北東から)
図版18	15・16・24 区	1. 15 区全景 (南西から) 2. 16 区全景 (北から) 3. 24 区全景 (北西から)
図版19	25・41・57 区	1. 25 区全景 (西から) 2. 41 区全景 (東から) 3. 57 区全景 (南から)
図版20	58・59・61 区	1. 58 区全景 (東から) 2. 59 区全景 (南西から) 3. 61 区全景 (西から)
図版21	S I 304・305・321 住居跡出土遺物	
図版22	S I 321 住居跡、遺構外出土遺物	
図版23	S S 24・25 集石跡	1. S S 24 集石跡全景 (北から) 2. S S 25 集石跡全景 (北から)
図版24	S K 745 (S S 24 集石跡下) 土坑	1. 全景 (南から) 2. 構築時全景 (西から) 3. 南北土層断面 (西から)
図版25	S K 751・752 土坑	1. S K 751 土坑全景 (西から) 2. S K 751 土坑南北土層断面 (西から) 3. S K 752 土坑全景 (西から)
図版26	S K 756・747・781 土坑	1. S K 756 土坑全景 (北西から) 2. S K 747 土坑全景 (西から) 3. S K 781 土坑 (北から)
図版27	S K 783・787 土坑	1. S K 783 土坑全景 (北から) 2. S K 783 土坑東西土層断面 (南から) 3. S K 787 土坑全景 (西から)
図版28	S K 788・793 土坑	1. S K 788 土坑全景 (南から)



図版29	S K 794・804土坑	2. S K 788土坑東西土層断面(南から)
		3. S K 793土坑全景(南から)
		1. S K 794土坑全景(西から)
		2. S K 794土坑南北土層断面(東から)
		3. S K 804土坑全景(南から)
図版30	S K 805土坑、1・2区	1. S K 805土坑全景(南から)
		2. 1区全景(東から)
		3. 2区全景(西から)
図版31	18・19・20区	1. 18区全景(北東から)
		2. 19区全景(南から)
		3. 20区全景(北から)
図版32	23・27・28区	1. 23区全景(東から)
		2. 27区全景(南から)
		3. 28区全景(北から)
図版33	29・31・32区	1. 29区全景(西から)
		2. 31区全景(西から)
		3. 32区全景(北から)
図版34	42・44・45区	1. 42区全景(北から)
		2. 44区全景(西から)
		3. 45区全景(東から)
図版35	46・48・53区	1. 46区全景(西から)
		2. 48区全景(南から)
		3. 53区全景(北から)
図版36	55・56区	1. 55区全景(北から)
		2. 56区全景(東から)
		3. 56区全景(西から)
図版37	58・60・62区	1. 58区全景(西から)
		2. 60区全景(西から)
		3. 62区全景(東から)
図版38	縄文土器	
図版39	縄文石器	
図版40	縄文石器	

## 調査に至る経過

武蔵国分寺跡の北側に隣接する日本国有鉄道中央鉄道学園は、昭和53年の幹線実習館建設工事の際、縄文および平安時代の各種遺構が発見されたことによって、学園全域が遺跡として周知されることになった。この頃、中央鉄道学園においては上越・東北両新幹線の開業に伴う乗務員の研修所としての重要性が高まったことで、これを契機に新幹線の研修施設を含む学園の施設整備が逐次進められることになり、幹線実習館はその最初の施設であった。このため、昭和54年以降も施設整備に伴って発掘調査を実施することになり、これまでに実習館・高電圧実験室（昭和55年度、第108次調査）、研修棟（昭和57年度、第147次調査）を終了している。

第147次調査を実施中の昭和57年8月17日、中央鉄道学園および東京建築工事局より、2ヶ年計画で施工する学園内下水道工事（総延長約2,000m）に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。市教育委員会は、下水道工事が学園全域にトレンチを設定するのと同様の内容を有するものであり、このことによって学園内における各時代遺構の分布状況および遺構の検出レベルを把握できるなど、今後の施設整備計画を検討する際の基礎資料を得る好機であるとの認識に立ち、市公共下水道工事において採用している調査方法（管理施設部分全域の試掘調査一重要遺構保存の爲の設計変更一本調査）を提示し、協力を求めた。

その後、昭和57年12月8日付東建総第1102号にて埋蔵文化財発掘通知書が提出され、その際国鉄側より市教育委員会指導の調査方法によって一期工事（A・B地区、延長484m）を急ぎたい旨の要請があったことから、とりあえず一期工事分の試掘調査を実施することとし、本調査については試掘調査の結果を待って改めて協議することになった。

試掘調査は、昭和57年12月15日から昭和58年1月24日まで実施されたが、予想どおり縄文・平安時代の遺構が多数検出された。そこで、1月26日に一期工事の本調査について国鉄側と協議を行なったところ、現地調査を3月1日から実施することで合意できたものの、二期工事以降の調査について①委託契約書の本体化、②報告書の刊行時期、③二期工事以降の調査計画、④調査範囲（工事区域外余掘り範囲）の設定など、二期工事の本調査開始前までに解決すべき問題が残された。その後これらの諸問題について協議を重ねた結果、①については、各期本調査の都度契約変更を行ない契約を一本化する、②については、報告書の刊行時期を本調査最終年度とし一冊とする、③については、二期工事以降の調査計画は本調査と併行して次期工事の試掘調査を実施し、本調査が中断しないよう準備する、④については、調査に支障をきたさない程度の余掘り範囲とするなど、基本的な問題について合意がなされた。以後はこの合意内容に沿って調査が進められたことから、以下その主な事柄について日を追って列記することにする。

昭和58年2月5日 国鉄より東建総第1330号にて一期工事（A・B地区）に伴う本調査について協議依頼がある。

2月25日 一期工事の発掘調査委託契約書締結（契約期間、昭和58年3月1日～同年10

月4日)。

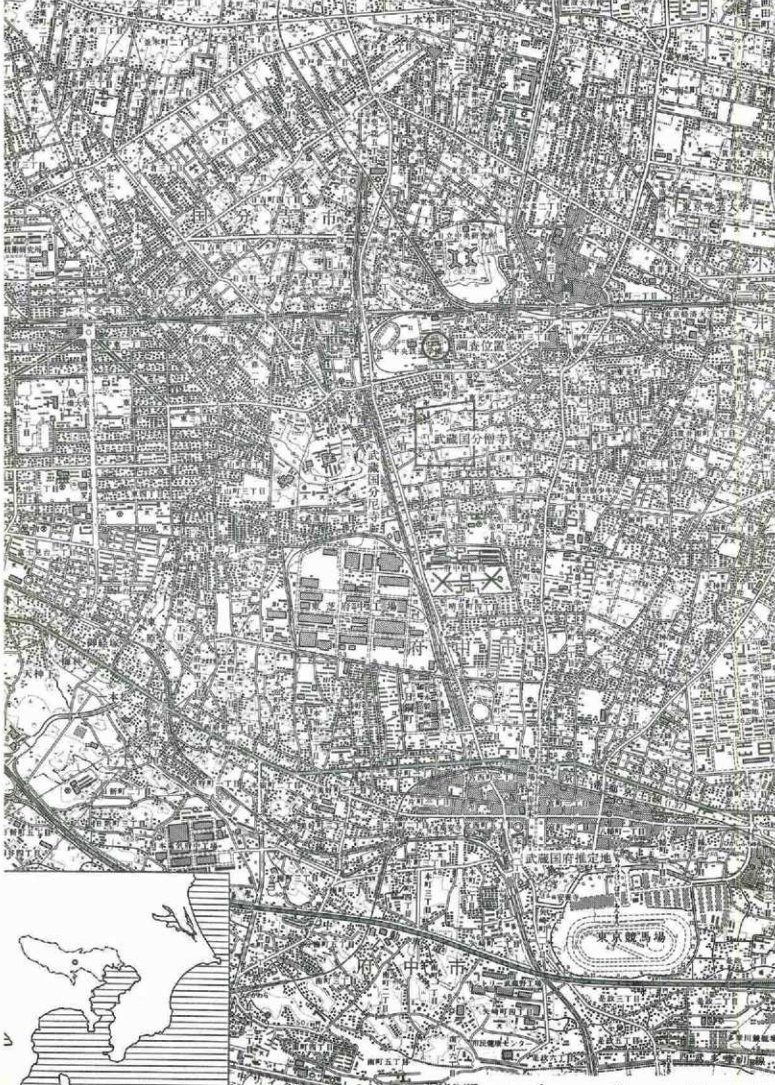
- 3月1日 本調査開始。
- 5月13日 二期工事(C地区、延長217m)の試掘調査を実施する(5月14日まで)。
- 6月13日 国鉄より東建総第344号にて二期工事に伴う本調査について協議依頼がある。
- 7月11日 発掘調査委託契約書の期間について契約変更を行ない(変更期間、昭和58年3月1日～同年10月25日)、二期工事に伴う調査を追加する。
- 10月11日 市教育委員会より契約期間の延長について依頼をする。
- 10月12日 国鉄より東建総第781号にて契約期間を昭和59年3月15日まで延長する旨の回答がある。
- 10月28日 三期工事(D地区、延長1,135m)の試掘調査を実施する(12月10日まで)。
- 昭和59年1月23日 国鉄より東建総第1134号にて三期工事に伴う本調査について協議依頼がある。
- 2月6日 発掘調査委託契約書の予算・期間について契約変更を行ない(変更期間、昭和58年3月1日～昭和59年9月27日)、三期工事に伴う調査を追加する。
- 2月10日 四期工事(E地区、延長163m)の試掘調査を実施する(3月29日まで)。
- 6月15日 本調査完了。
- 8月30日 市教育委員会より契約期間の延長について依頼をする。
- 9月5日 国鉄より東建総第635号にて契約期間を昭和60年3月31日まで延長する旨の回答がある。

以上の経過によって契約変更された最終の発掘調査委託契約書の内容は、契約期間が昭和58年3月1日から昭和60年3月31日、契約金額が9,207,600円となる。

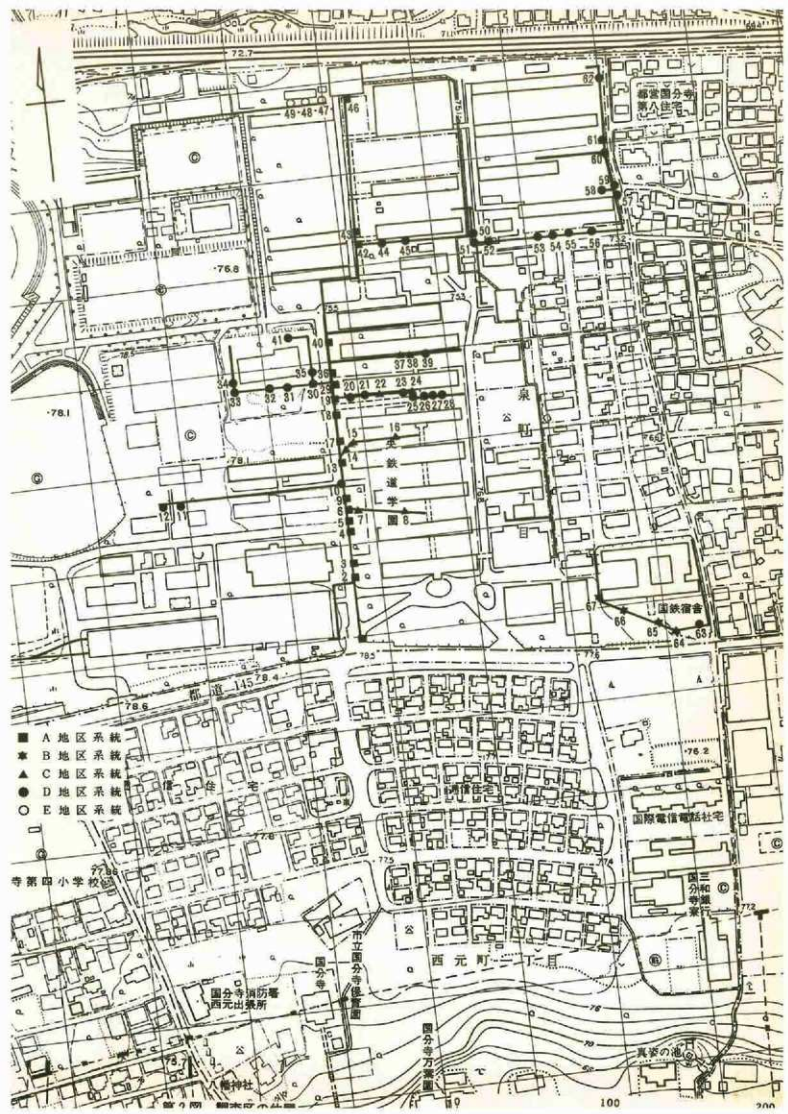
## 武蔵国分寺遺跡調査会

(昭和59年6月現在)

会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
"	大 島 外 治	国分寺市教育委員会委員長
理 事	永 峯 光 一	国学院大学栃木短期大学教授
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 詰 秀 一	立正大学教授
"	本 多 良 雄	国分寺市長
"	興 津 精 二	国分寺教育委員会教育長
"	永 井 佳 雄	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
"	坂 本 喜 市	国分寺市社会教育委員会議々長
"	佐 藤 敏 也	国分寺市文化財保護審議会委員
"	松 井 新 一	"
"	吉 田 格	"
"	藤 間 恭 助	"
監 事	浅 見 正 平	国分寺市社会教育委員
"	清 水 武	国分寺市教育委員会社会教育課長
事 務 局 長	関 口 雄 基 臣	国分寺市教育委員会教育次長
事務局長補佐	大井川 武 彦	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長
"	安 田 暉	国分寺市教育委員会文化財課長
事 務 局 員	小 林 文 治	前国分寺市教育委員会文化財課庶務係長兼文化財保護係長
"	田 倉 武 市	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長兼文化財保護係長
"	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会庶務係員
調 査 団		
調 査 団 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
調 査 副 団 長	永 峯 光 一	国学院大学栃木短期大学教授
"	大 川 清	国士館大学教授
"	坂 詰 秀 一	立正大学教授
調 査 員	有 吉 重 藏	国分寺市教育委員会文化財保護係員
"	福 田 信 夫	"
"	上 村 昌 男	"
"	高 林 和 恵	嘱託 (58年7月退出)
"	三 木 弘	嘱託



第1図 滝越の位置



調査区	検出遺構									調査区旧番号	図面番号
	歴史時代					縄文時代					
	住居跡(SI)	掘立柱遺構(SB)	溝跡(SD)	土坑(SK)	小穴	その他(SX)	集石跡遺構(SS)	土坑(SK)	小穴		
1								2		A-23・24	10
2				1(740)					10	A-1	4・10
3				1(744)						A-22	4
4									1	A-15	10
5					1				2	A-2	4・10
6			2(168・196)					2(748・749)	3	A-3～11	4・10
7			1(168)							C-38	4・11
8			1(176)		1					C-37	4
9							1(25)	1(747)	1	A-3～11	10
10					5				2	D-5	5・11
11		2(75・76)			21					D-3	5
12				2(797・798)	1					D-2	5
13					4				2	A-5～7	5・11
14					1					C-45	5
15				1(767)	3					C-40	5
16					2					C-39	5
17			1(170)						3	A-8	6
18								1(750)		A-16	11
19										A-12	11
20									14	D-21	12
21								1(781)		D-22	12
22			1(174)							C-44	6
23									2	D-23	12
24				1(766)	2					C-41	6

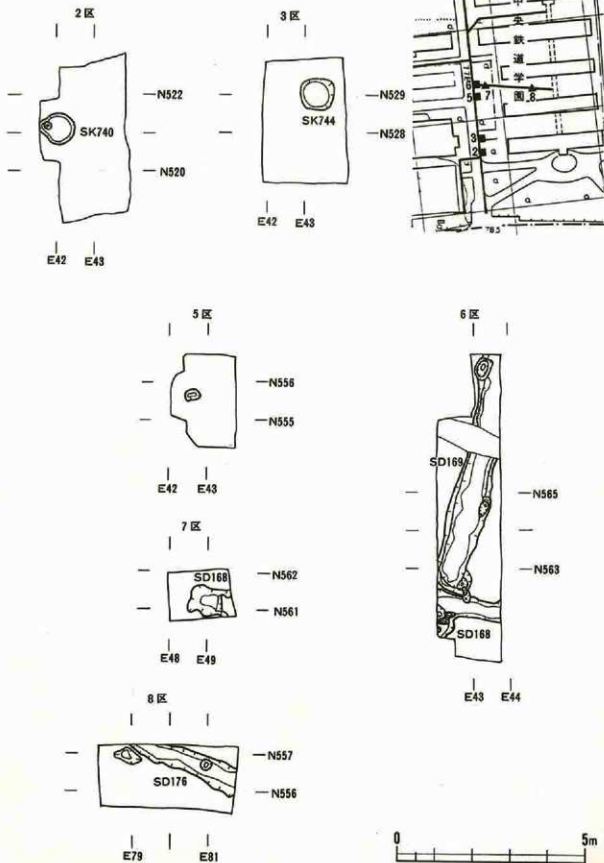
第1表 発見遺構一覧表

25				4					D-6	6
26		1 (182)							D-7	6
27							3		D-24	12
28						1 (787)	1		D-25	12
29						1 (751)			A-13	12
30							1		D-28	13
31						2 (791·7 92)	3		D-27	13
32				1				2	D-8	7·13
33						1 (793)	1		D-28南	13
34						1 (794)	2		D-28北	13
35				1					D-9	7
36						1 (752)	1		A-14	13
37		1 (174)							C-43	7
38		1 (175)							C-42	7
39		1 (182)							D-11	7
40						1 (753)	4		A-19~17	13
41				4					D-10	7
42			1 (755)					4	A-9	8·14
43						1 (756)	1		A-21	14
44		1 (172)						4	D-12	14
45		1 (181)						3 (788·7 89·790)	D-13·29	8·14
46			1 (757)					11	A-10	8·14
47						1 (805)			E-37	14
48							1		E-38	14
49						1 (804)			E-39	14
50					1 (34)				D-15	25

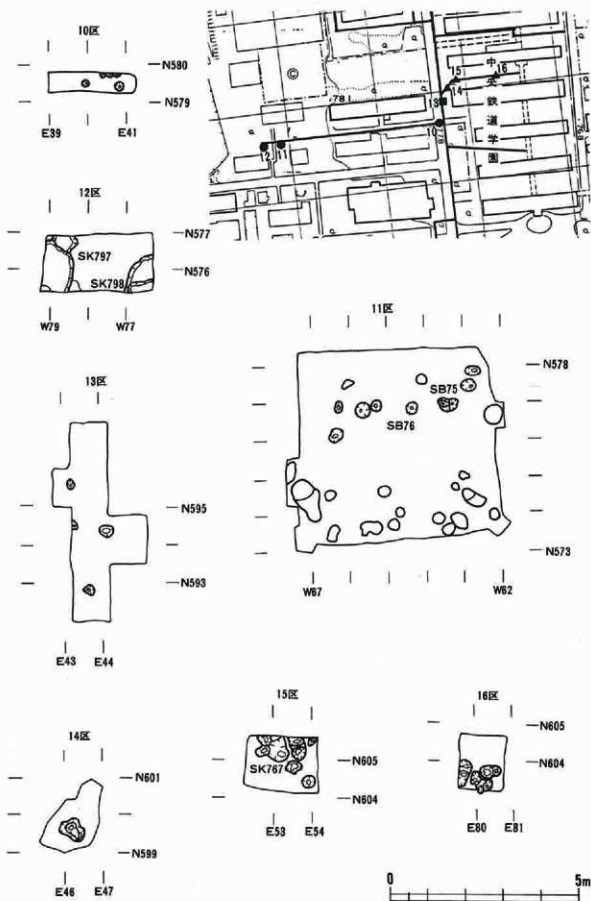


51					1 (34)				D-14	25
52					1 (34)				D-16	25
53							1 (782)	2	D-36	15
54							1 (785)		D-31	15
55								2	D-32	15
56							3 (784-785-786)	20	D-33	15
57				4			3 (801-802-803)	5	D-18	8-16
58				2					D-17	8
59				2				1	D-19	8-16
60							1 (800)	1	D-34	16
61				1				3	D-35	8-16
62								2	D-20	16
63	1 (321)								D-1	9
64	1 (304)			1 (738)					B-1	9
65	1 (305)			1 (739)	6				B-2	9
66				1					B-3	9
67							1 (24)	1 (745)	B-4	16

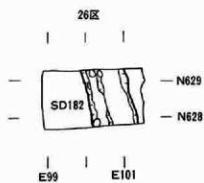
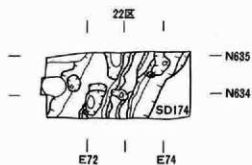
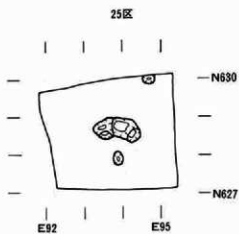
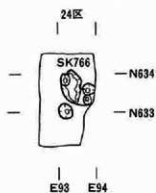
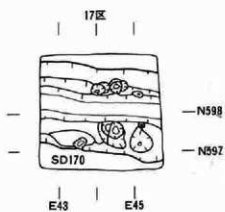
第3図 遺構配置図 2・3・5・6・7・8区



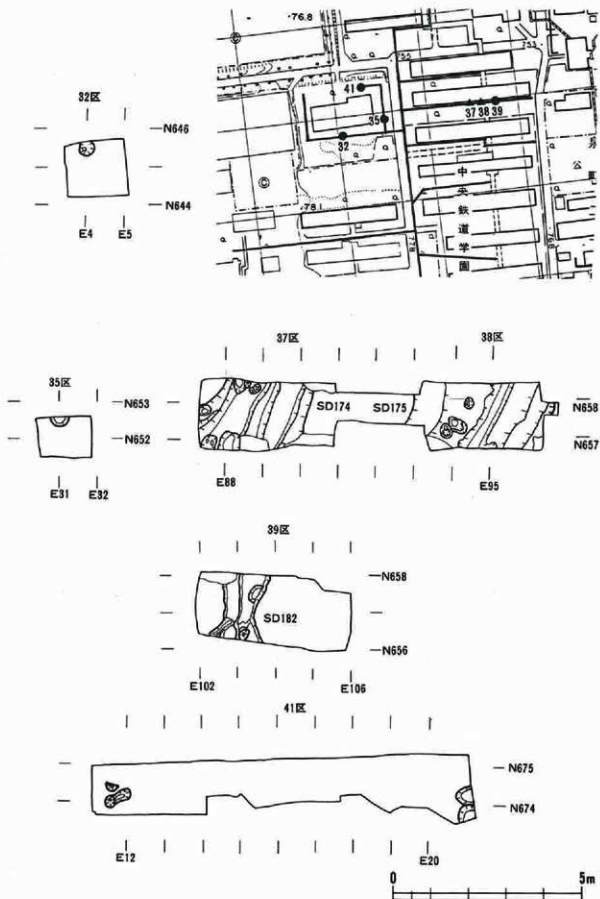
第4図 遺構配置図 10・11・12・13・14・15・16区



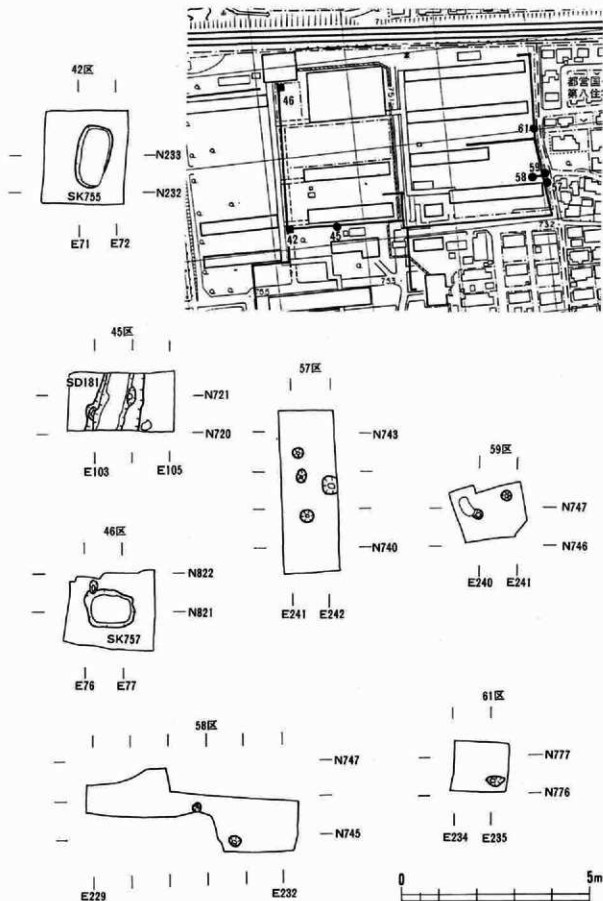
第5図 遺構配置図 17・22・24・25・26区



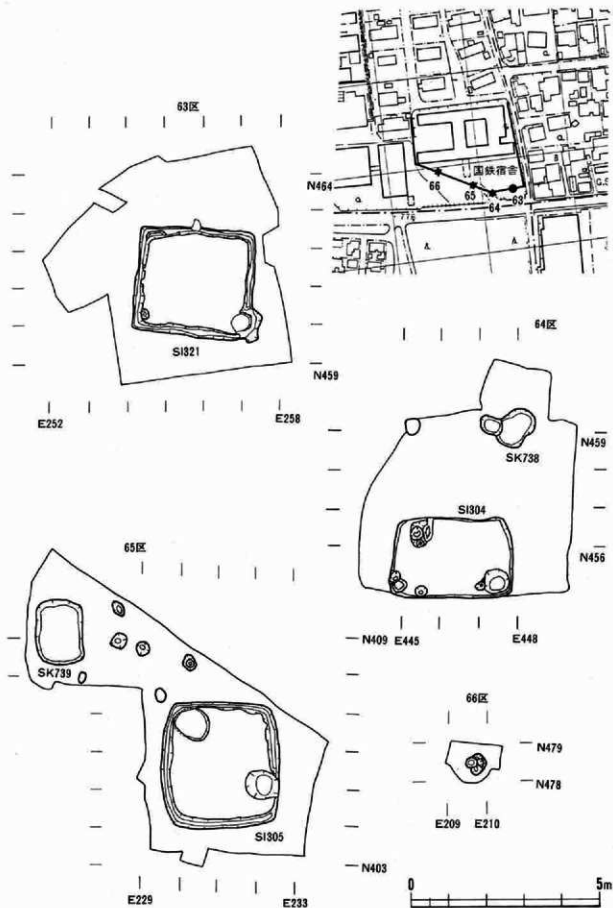
第6図 遺構配置図 32・35・37・38・39・41区



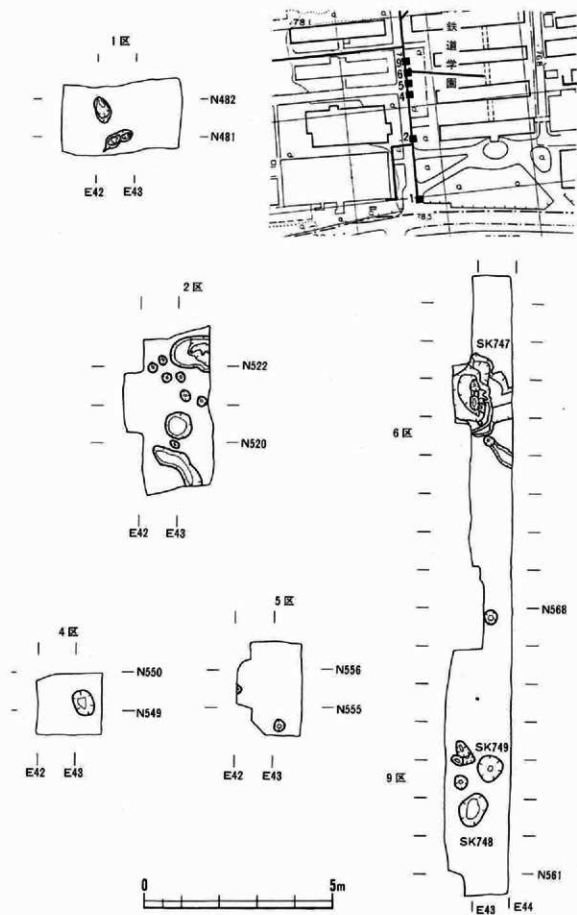
第7図 遺構配置図 42・45・46・57・58・59・61区



第8図 遺構配置図 63・64・65・66区

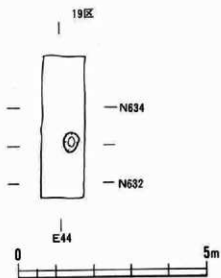
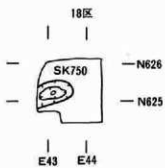
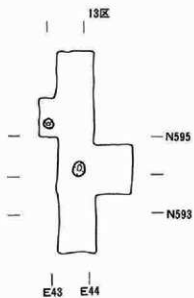
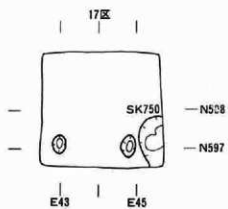
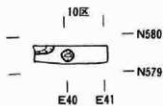
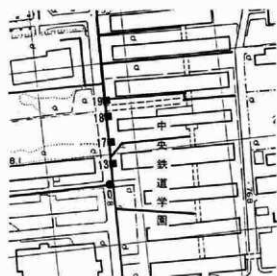


第9図 縄文時代遺構配置図 1・2・4・5・6・7区

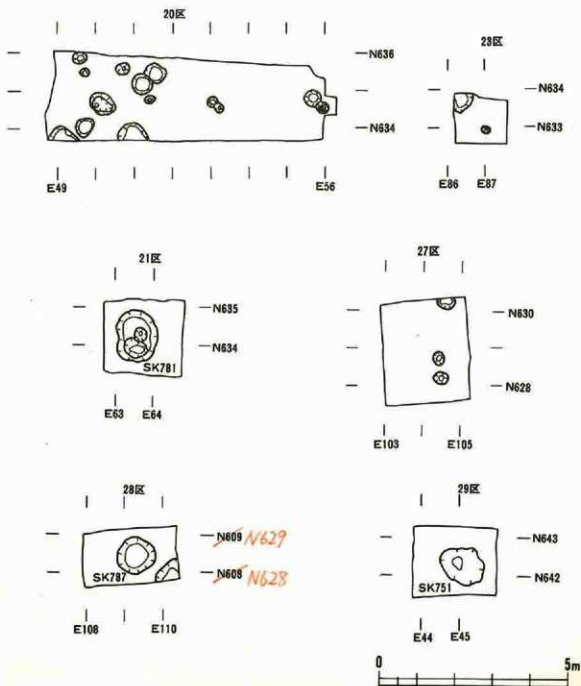
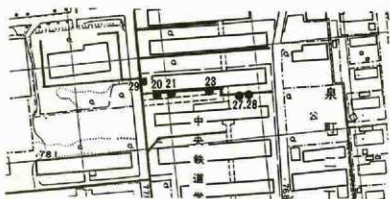




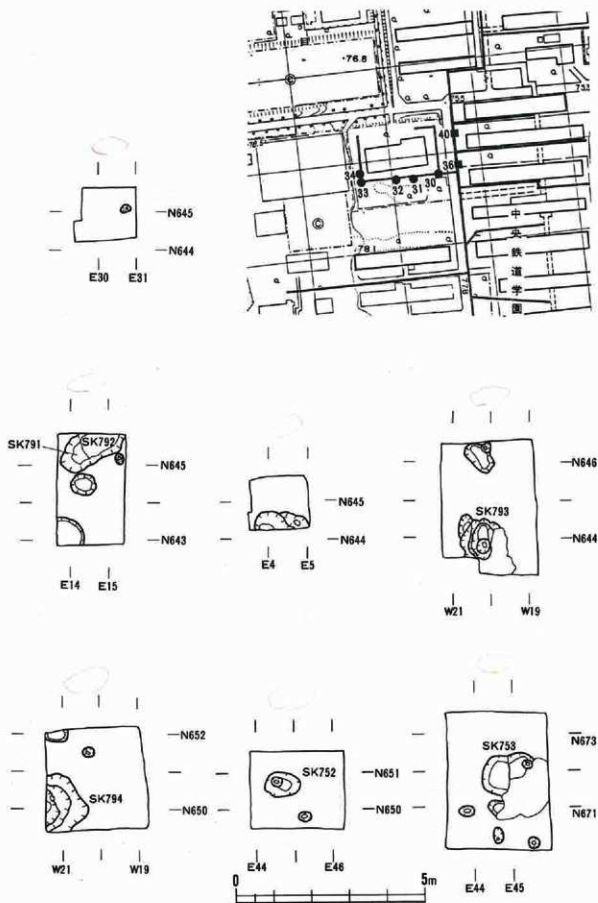
第10 縄文時代遺構配置図 10・13・17・18・19区

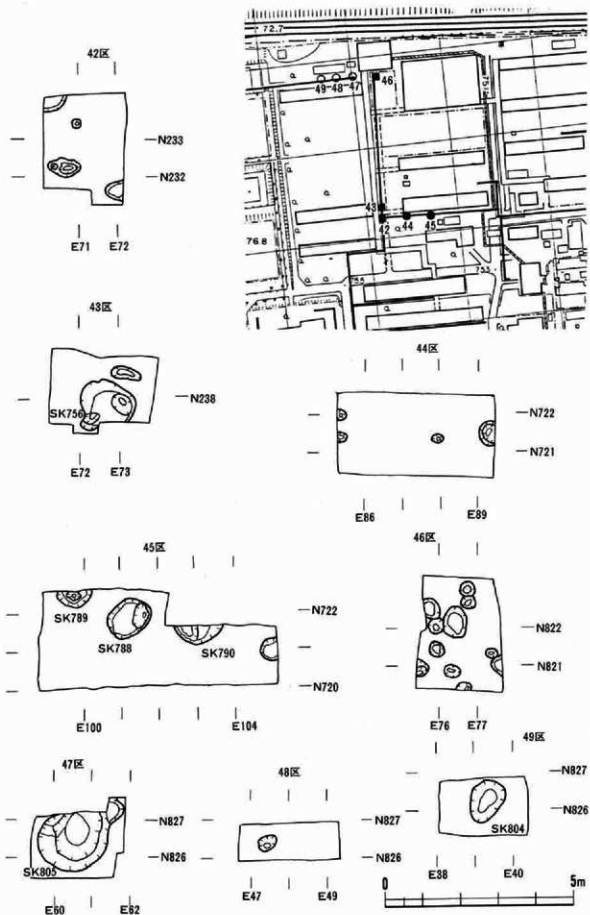


第11図 縄文時代遺構配置図 20・21・23・27・28・29区

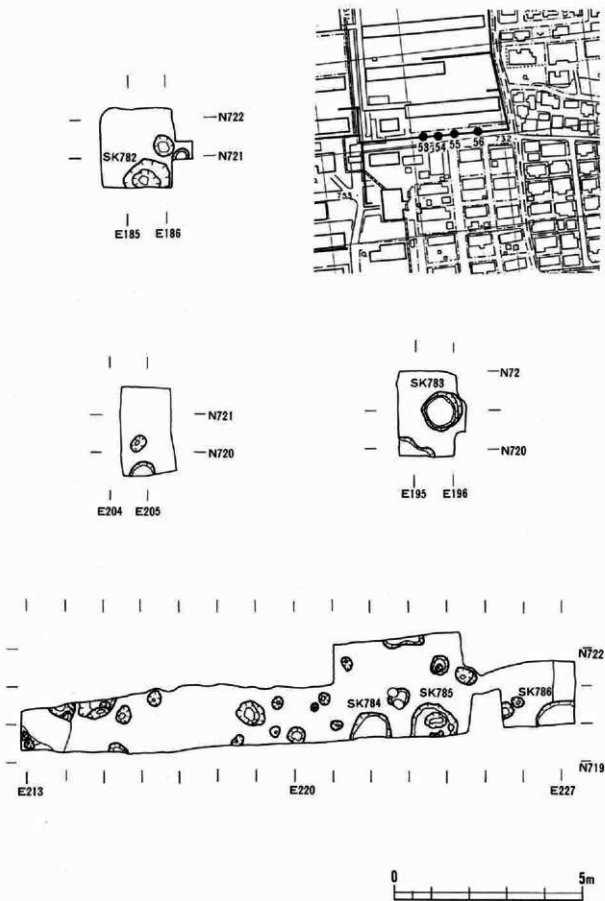


第12図 縄文時代遺構配置図 30・31・32・33・34・36・40区

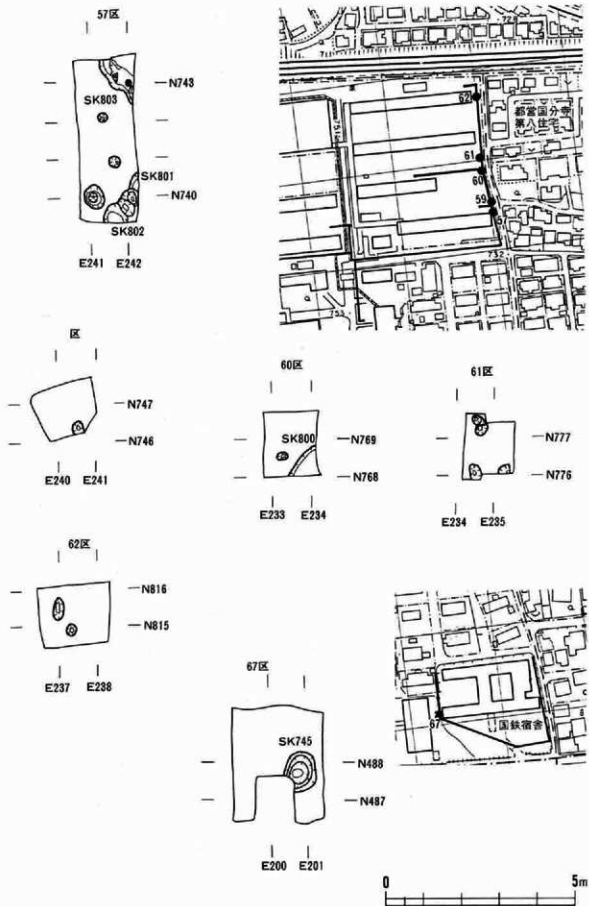




第14図 縄文時代遺構配置図 53・54・55・56区



第15図 縄文時代遺構配置図 57・59・60・61・62・67区



## II 調査地区の概観

### 1. 調査地区の位置・立地

調査地区は国分寺市泉町2丁目6番7号に所在する。南は都道145号に、北は国鉄中央線に挟まれ、国鉄武蔵野線の東約400mのところになる。僧寺中軸線より北へ500～800m、西50～東250mほどの武蔵野段丘上に立地する。

武蔵国分寺跡は国分寺市西元町1～4丁目を中心とする付近一帯に所在し、僧寺金堂を中心として、東西2.0km、南北1.5kmほどの範囲で遺構の分布が認められる。僧尼寺の主要構造物は武蔵野段丘の下の立川段丘上にあるが、僧寺々城を区画する溝跡が武蔵野段丘上にまで延びていたりしており、遺跡は蛇行しながら東西方向に走る比高12mほどの段丘崖(国分寺崖線＝通称ヘケ)を越えて、両段丘上にまたがって立地している。

この調査地区の東から北に接して、国分寺崖線を南から北西方向に切り込んだ野川による開折谷である恋ヶ窪谷が幅約60mにわたって走っている。すなわち国分寺崖線と恋ヶ窪谷によりやや舌状に突出する様相を呈する台地上の中央部の東端にあたるわけである。

この恋ヶ窪谷を狭んだ北側の対岸には縄文時代中期の連弧文土器を多く出土して著名な恋ヶ窪遺跡が、東側対岸には先土器時代及び縄文時代早期～中期の遺物を多出した花沢東遺跡が、更に南方400mには中期勝坂式土器を多出した多喜窪遺跡がある。本調査地区の縄文時代の遺構や遺物はこれらの遺跡と密接した関係にあるものと思われる。

周辺における調査では、第3次調査(リオン厚生会館建設地)、第51次調査(KDD社員寮建設地)、第107次調査(佐藤国分寺共同住宅建設地)などがある。いずれも本調査地区の南東に位置している。歴史時代の遺構に関して言えば、第3次調査では住居跡7、土坑4、第51次調査では住居跡4、掘立柱建物跡4、柱列跡(?)1、道路状遺構1、土坑16、そして第107次調査では住居跡5、道路状遺構1、土坑3を検出している。

また今回の調査以前にこの鉄道学園内において、第72次・第108次・第147次の3度の調査が幹線実習館或は研修棟の建設に伴って行われており、住居跡7、溝跡3、掘立柱建物跡1、土坑21、伊跡2などが検出されている。

その他ガス・水道・下水管などの埋設工事の立会い調査の結果を考え合わせると、今回の調査により検出された住居跡と第72次調査により検出された住居跡がともに武蔵国分寺遺跡の住居跡の中では北限にあるものと理解することができるとともに、各種の歴史時代の遺構も恐らくは本調査地区のものが北端になるものと考えられる。

## 2. 層 序

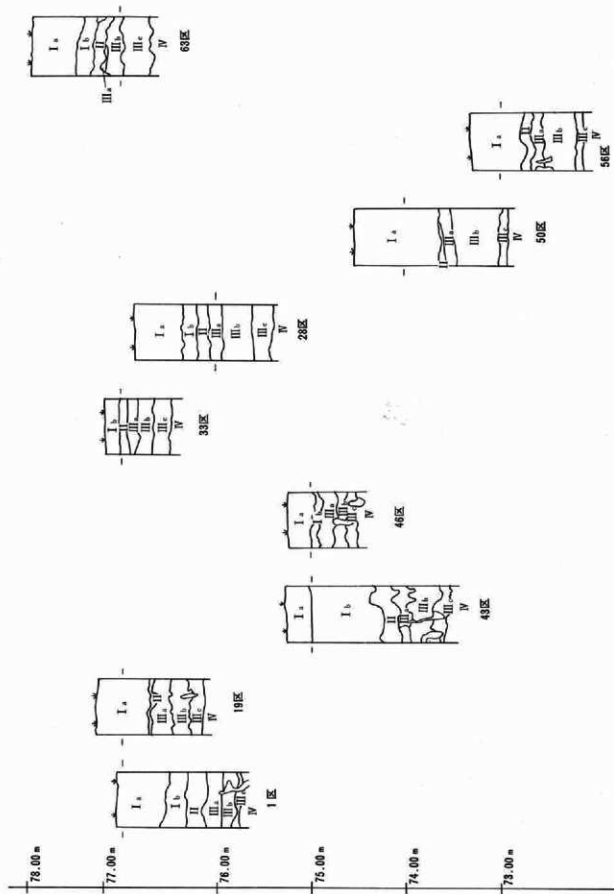
調査地区は武蔵野段丘上にあるが、調査対象が鉄道学園東半以上に及び、比較的広い範囲で調査を行っているため、調査区によりやや標高差がある。

すなわち先述したように東側から北側にかけて恋ヶ窪谷が入り込んでおり、56区の東約50mには恋ヶ窪谷より派生した小開折谷が西に約40m挟り込んでいる。従って東方に行くにつれ、標高は下がり気味になり、また小開折谷に向かう傾斜もあり、やや複雑な様相を呈している。

しかし堆積土は各調査区とも類似した層序を示している。

- I a 層 盛土。ローム・バラス・セメントなどを含む客土。その堆積幅は調査区により異なるが、学園内各所で認めることができる。
- I b 層 表土。黒褐色土。上層は掘削を受けている場合が多い。
- Ⅱ 層 黒色土。黒味が強い。黒色土粒を多く含む。粒子が粗く、やや粘性に欠ける。各調査区において10cmほど堆積する。遺構内の堆積土に類似する。歴史時代の遺物を出土する。
- Ⅲa 層 黒褐色土。やや茶褐色味を帯びる。締まりよく粘性もある。Ⅲ層の上部でⅡ層に接している。Ⅱ層とⅢb層との境は漸移的である。平均10cmほどであるが、調査区によっては薄層である場合もある。縄文時代の遺物を出土する。
- Ⅲb 層 暗茶褐色土。下部に行くほどに茶褐色味を帯び、また粘性も増す。縄文時代の遺物を多く含む。歴史時代の遺構の大半はこの層の上面で検出が容易となる。
- Ⅲc 層 茶褐色土。ローム漸移層。縄文時代の遺物を若干含む。縄文時代の遺構は本層上面で検出が容易となる。
- Ⅳ 層 暗黄褐色ローム。ソフトローム。Ⅲc層との境はやや不明確である。調査による掘削深度は最大本層上面までとした。





第16图 标准层序

### Ⅲ 発掘経過

#### 1. 第168次調査

第一期工事（A・B地区）の試掘調査（延長484m、面積242㎡）の結果を受けた委託契約締結後、昭和58年3月1日の調査開始に向けて諸準備を進めた。すなわち調査会側の発掘器材及び作業員の確保と、国鉄側の調査範囲の設定であった。調査範囲の設定は人力によって行い、調査活動及び検出遺構の理解が可能な最小限度内の面積に留めた。

3月1日よりまずB地区系統の調査を開始した。手順としては、余掘部分を含めた調査区の再度の遺構確認作業を行うことから始め、それとともに任意に基準杭を設置し、後日の測量作業に備えた。また調査の順序は住居跡から着手し、それらの終了後67区の集石跡遺構の調査を実施した。B地区調査は4月20日に全てが終了したが、それより2日前の4月18日よりA地区系統の調査を開始した。

調査手順はB地区調査時と変わらないが、この系統は工事により掘削深度が深いため、縄文時代の遺構の調査も行った。すなわち試掘調査時においては、歴史時代の遺構が検出されない部分をⅢc層まで掘り下げて遺構確認作業を済ませ、それを含めた調査区の設定を行っており、歴史時代の調査区に関しては調査会側でⅢc層までの掘り下げ、遺構確認作業を経たのち遺構調査を行った。従って歴史時代の遺構調査の存在により設定された調査区では、上述の作業が一貫的に行われた。Ⅲb層に包含された遺物量は少なく、比較的順調に調査は進行した。また、本地区においても、各調査区の西側に任意で基準杭を設定し、調査を進めた。4月18日より始めたA地区調査は7月12日に終了したが、終了する1週間ほど前からA・B両地区に任意に設定した基準杭の測量を行った。またA地区調査中の5月13・14日の両日に亘り、第二期工事（C地区）の試掘調査（延長217m、面積109㎡）を行った。

7月11日の発掘調査委託契約の変更を受け、C地区系統調査の準備に取りかかった。なおA・B地区調査終了後、作成した図面等の点検・整理を行ない、C地区調査は8月4日より開始した。

C地区系統では溝跡が4条（2条は同一）が確認されていたため、人員を振り分け、極力同時に調査が進行するよう努めた。この系統の工事掘削深度はⅢc層まで達しないため、歴史時代の遺構の調査のみに留め、9月13日に調査を終えた。これにより、第168次調査が終了したこととなった。

第168次調査の経過をまとめると以下になる。

A地区系統（1・2・3・4・5・6・9・13・17・18・19・29・36・40・42・43・46区）

期間：4月18日～7月12日 実働日数：46日 調査総面積：106.1㎡

B地区系統（64・65・66・67区）

期間：3月1日～4月20日 実働日数：32日 調査総面積：90.7㎡  
C地区系統（7・8・14・15・16・22・24・37・38区）

期間：8月4日～9月13日 実働日数：25日 調査総面積：43.4㎡

## 2. 第190次調査

第三期工事（D地区）の試掘（延長1,135㎡、面積568㎡）を受けた契約変更に基づいて、昭和59年2月7日より調査を開始した。調査終了と同時に配管工事が実施されるという状況であり、調査の順序も工事の手順に合わせて組んだ。調査手順はA地区調査の場合とはほぼ同様であったが、掘削深度がⅢb層上面で留まるものについては、試掘時の遺構確認深度で止めた。稀有の降雷のため、調査開始当初は思うように作業は進まなかった。なお調査開始と同時に、先の第168次調査で設置した杭を含めた、学園内を一周するトラバース測量を行った。

D地区調査中の2月10日より3月29日まで実施した第四期工事（E地区）の試掘調査（延長163㎡、面積82㎡）を受けて、協議した結果D地区調査と並行して調査を実施することとなった。そこでE地区調査を5月23日より5月30日まで行った。

D地区調査で最後まで残ったのが、63区のS1321住居跡であった。調査に先行して国鉄側で行われた調査区の設定では遺構全体を網羅しきれず、まず調査区の拡張作業から始めた。しかし、調査区の中央に縁石が走っており、また周囲には樹林が多く植えられているため、作業は困難を極めた。調査区を拡張し、遺構を明確に捉えてからは、遺物量が少ないこともあって調査は順調に進行し、6月15日に調査を終えた。これにより、第190次調査が終了したこととなった。

第190次調査の経過をまとめると以下になる。

D地区系統（10・11・12・20・21・23・25・26・27・28・30・31・32・33・34・35・39・41・44・  
45・50・51・52・53・54・55・56・57・58・59・60・61・62・63区）

期間：2月7日～6月15日 実働日数：83日 調査総面積：265.1㎡

E地区系統（47・48・49区）

期間：5月22日～5月30日 実働日数：6日 調査総面積：11.7㎡

今回の調査を総計すると、

期間：昭和58年3月1日～昭和59年6月15日 実働日数：185日 調査総面積：517㎡  
となる。

なお、各調査区の調査進行は次表を参照されたい。



年月日	昭和50年/2月					3月					4月					5月					6月					回数					
	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25	5	10	15	20	25		5	10	15	20	25
案件進捗日数																															5
10区																															5
11区																															20
12区																															13
20区																															5
21区																															5
23区																															5
25区																															5
26区																															18
27区																															4
28区																															4
28区																															5
30区																															5
31区																															12
32区																															11
32区																															6
33区																															9
34区																															5
35区																															5
39区																															10
41区																															10
44区																															6
45区																															6
47区																															6
48区																															6
49区																															7
50区																															5
51区																															5
52区																															10
53区																															5
54区																															10
55区																															4
56区																															8
56区																															8
57区																															12
58区																															5
59区																															9
59区																															9
60区																															5
61区																															10
62区																															8
62区																															8
63区																															41

備考

調査開始  
調査開始

調査開始  
調査開始

調査終了

第8表 調査工程表 (第190次)

## Ⅳ 検 出 遺 構

本調査によって検出された遺構は、堅穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2軒、溝跡8条、土坑7基、小穴77個、不明遺構1であった。堅穴住居跡と掘立柱建物跡とは本学園構内の南側に偏在している。また溝跡もその分布範囲に広がりを見せるものの南半にまとまる。土坑と小穴については偏りはみられなかった。

本調査は排水改良工事に伴うものであるため、設定された調査区の面積はかなり限られており、堅穴住居跡のみは調査区を拡張して完掘することができたが、半掘に留まった遺構も数基あった。遺構の大半は検出が容易となるⅢb層上面で確認した。しかし本来の掘り込みはもう少し上層からなされたものと考えられる。

### S1304 住居跡（第17図、図版1～2）

64区にあり、僧寺中軸線の東245m、北456mに位置する。南壁は国鉄宿舎の門壁と接しているが、立ち上がりはほぼ捉え得た。

平面形は南北2.05m、北辺2.65m、南辺3.1mのやや不整な台形状を呈しており、各隅は丸味を帯びている。北壁のやや西寄りにカマドが設けられている。住居の南北方位は僧寺中軸線とほぼ一致している。

構築時にはⅢc層下面まで掘り込んでいるが、中央に向かって僅かに窪まっている。東側半分に3～5cmほどの貼床をするが、その他では掘り込み下底面をそのまま床面としている。壁高は15～20cmと低く、特に西側では床面が高くなっており壁高は10cmほどしかない。

周溝は認められない。

カマドは北壁にある。西壁際より60cmを測り、西に偏っている。現状では東西70cm、南北70cmの規模を測るが、遺存状態が悪く、西側の袖が欠損しており、本来は東西が90cmほどあったものと推察される。また東側の袖も基底部が若干残っている程度であり、構築材である白色粘土が僅かに認められたのみである。カマドは床面を浅い皿状に掘り窪め、その南端に小穴を設けている。掘り込みは壁外まで達することはなく、北東隅以外住居の北壁と接しない皿状の窪みの中央を更に径約35cmほどの大きさと僅かに下げて火床部としている。従って地山のⅣ層がそのまま火床になっている。火床部はカマドのほぼ中心に位置しており、焼土及び炭化物が2～3cmの厚みで堆積している。遺存状態が悪く、本来の形状を推測するのは難かしいが、おそらくかなり稚拙な構造のものであったと考えられる。

床面は住居の西壁際より1m以東が貼床され堅固であるが、それより西側の地山の部分でも同様に堅くなっている。この堅固な床面は西側では壁際まで達しているが、他の部分では壁際より10～20cmほど離れており、壁際との間は軟弱である。更にカマド部東西側及び南西隅の小穴付

近では軟弱なままの状態が広がりを見せている。

貼床面下には何らの構造も確認されなかった。

堆積土は黒色土を主体としており、焼土粒混入の割合によって上下に二分することができるが、ほぼ均一であるといえる。

住居の南東隅にある小穴は大小の掘り込みを有する不整形を呈している。堆積土は遺構の大半を占める上層の黒色土と、下層の黄褐色土に分かれるが、上層の堆積土は住居内堆積土4層と等しい。貯蔵穴と考えられるが、中からは土師器の小破片1点が検出されただけであった。

遺物はカマドを中心として周囲に散在しているが、点数自体が少ないこともあって、その広がりも住居北半には限られている。接合資料もカマド付近に多い。

#### S1305 住居跡（第18～19図、図版3～4）

65区にあり、僧寺中軸線の東221m、北466mに位置する。本調査で検出された住居跡の中で最も西側にある。

平面形は南北3.30m、東西3.04mの方形を呈するが、僅かに圓張り気味になっている。北西隅及び南西隅は丸味を帯びている。カマドは認められないが、東壁に接して焼土を有する浅い掘り込みが認められた。また南壁には黒色土により構築された壇状の遺構（以下“マウンド状遺構”と呼ぶ）が設けられている。住居の南北方位は僧寺中軸線とはほぼ一致しており、先述のS1304住居と平行することになる。

構築時にはⅢc層下面～Ⅳ層上面まで、中央に向かって僅かに窪みはいるがほぼ平坦に掘り込み、そのうち軟質のローム土で全体的に貼床を施している。貼床の厚味は中央部で約8cm、壁際になると2～3cmである。また北東隅と南西隅とは、周溝上に貼床面がのびている。壁高はほぼ30cmである。

周溝は東壁南側の一部を除き全周する。上面幅20～30cm、底面幅10cm前後で深さは約10cmである。全体としては割合にしっかりとしたものであるが、北側は若干不明瞭になる部分も認められる。

上述したようにカマドの存在は認められなかったが、焼土を有する浅い掘り込みが東壁に接して設けられていた。北壁際より2mを測り、南に偏って位置している。径約80cmのやや不整の円形を呈しており、掘り込みは浅く住居床面より最大10cmにすぎない。また掘り込みは壁外には及ばない。堆積土は上層の黒色土と下層の焼土粒を混入した黒褐色土に分かれるが、上層土は住居内堆積土2層と同一である。周溝はこの部分に及ばないように巡っており、丁度カマドと周溝の関連を想起させる。従ってカマドの火床部のみが残存したものと考えることもできよう。しかし住居内堆積土にカマド構築材の混入が一切認められないこと及び東壁までの間隔が狭いことから、炉とするのが妥当と考える。

マウンド状遺構は南壁のほぼ中央に位置するが、やや西側に延びている。東西1.2m、南北1.1m

を測る不整形を呈している。ローム土を混入した黒色土を構築材としており、やや硬質である。本施設は周溝の上面にまで延びた貼床の上に形成されたものであるが、土師器坏が周溝内出土の破片とマウンド状遺構内出土の破片との接合資料であることを考えると、貼床からマウンド状遺構の形成までさほどの時間幅はなかったものと推測される。更にまたこの資料により本住居の構築の上限が示される。ところでこのマウンド状遺構の性格については、入口部施設とするのが妥当であると考えられる。しかし北西端が炉と近接している点に若干の疑問が残る。

床面はマウンド状遺構の前面より北東方向に約1.2mの範囲でやや細く堅固になっているにすぎない。

貼床而下には何らの構造も確認されなかった。

住居内堆積土は黒色土を主体としているが、茶褐色土及びその固まりを混入する層と、混入しない層(1層)に大別される。しかし各層とも両通してしまりはよい。

遺物は極めて少なく、しかもそのいずれもが小破片であった。接合資料は上述の土師器坏1点のみであり、また集中するような傾向も認められなかった。

#### S1321 住居跡 (第19～20図、図版5～6)

63区にあり、僧寺中軸線の東256m、北461mに位置する。住居跡上にコンクリート製の縁石が走っていたため、それを養生しながら調査区を拡張して全体を調査した。また東側1/3が攪乱されており、床面及び壁体を破壊するほどではなかったが、堆積土の状況を捉えることはできなかった。そこで最後まで残しておいた縁石部分を利用して、斜方向ではあるが、堆積土の観察を行った。

平面形は南北2.85m、東西3.10mのやや東西方向に長い長方形を呈している。北東隅のみが僅かに丸味を帯びている。南東隅にカマドを設ける。住居の南北方向は僧寺中軸線より約5.5度東偏する。

構築時にはⅢc層下面まで底面をほぼ水平に掘り込み、住居の中央に東西約1.5m、南北約1.2mの範囲にローム土で厚さ2～3cmほどの貼床をするのを除き、地山面をそのまま床面としている。更にこのローム土の貼床面上に、黒褐色土の2次貼床面が認められた。厚さは1～2cmほどの薄いもので、幾分途切れがちにあった。壁高は南壁で最大30cmであったが、これは遺構確認面からの計測であり、Ⅱ層直下の本来の住居掘り込み面からは約40cmである。

周溝はカマド部分を除き全周するが、東側の南端ではカマドの下にまで延びている。また南側の東端も本来はカマドの下にまで達していたものである。従ってカマドは周溝の両端部を埋めたのち構築されたものである。上面幅約20cm、底面幅約10cmで深さは4～8cmである。西側及び南側では若干浅くなっているが、全体にしっかりとしている。西側中央部で幅をやや狭くしており、入口部分とも考えられるが、その他に特別な構造は認められず、断定し難い。

カマドは南東隅に設けられている。南北75cm、東西70cmと規模は小さい。残存状態は比較的



よく、両袖部、奥壁部及び天井部の一部が残っていた。特に南側袖部はよく残っており、前面を欠失しているが、ほぼ原形を保っている。カマドはローム土を構築材としており、粘土の使用は全く認められなかった。ローム土中には黒褐色土が僅かに混入するほか、小石が入れられており、補強材の役割を果たすものと考えられる。カマドより瓦片が数点出土しており、構築材として再使用されたものと考えられるが、いずれも原位置を保つものとは言い難い状況にあった。壁外への掘り込みは2段になっており、東西最大35cmであるが南壁には上段部分が10cmほど延びているにすぎない。上段部分の平面形が「Λ」字状を呈するのに対して下段部分は「Π」状を呈する。下段部分は掘り込み際より9cm、深さ10cmのところからなされ、カマド奥壁はこの部分に沿って構築されており、現況では上段部分の下底面と天井部上面とがほぼ一致している。火床部はカマドのほぼ中央にある。南北39cm、東西41cmの規模で、中央が赤色焼土化している。カマド構築時のソフトローム面をそのまま火床としている。両袖内面も火熱を受けている。

1次貼床面、2次貼床面ともに堅固になっているが、その他では特に堅固になる部分は認められなかった。

貼床面下には小穴が1個確認された。住居のほぼ中央に位置し、南北42cm、東西34cm、深さ38cmを測る。

住居内堆積土は均一ではない。大別するならば、床面直上の茶褐色土及びその固まりを混入する黒色土層（6・7・8・14層）、しまりがよくローム土を混入する黒褐色土層（4・5層）、最も黒味の強い層（2層）とやや明度がありローム粒をやや多く含む層（1・3・9・10層）に分けることができる。

住居の中央から北側にかけて炭化物がやや集中して検出された。いずれも床面直上ないしはそれに近い位置にあった。大半が小細片であるが、数点長さ10cm前後、径約1cmの比較的遺存状態のよいものもある。その性格については不明である。

遺物はカマド付近を中心としてほぼ全体に出土するが、北東部分において少ない。カマド部以外の遺物はいずれも床面よりやや浮いた状態で出土している。遺物量は先述のSI304住居跡とほぼ同量である。今回検出された3軒の住居跡から出土した遺物は質量ともに武蔵国分寺遺跡において発見されたものの中では極めて貧弱な部類に属すものと言える。

#### SD168溝跡（第21図、図版7～8）

6区（僧寺中軸線の東42～44m、北561～562m）と7区（同東49m、北561m）において発見された、やや北に偏く東西方向溝である。

ところが6区南側において、本溝跡は南側に屈曲し「Γ」状となる。西側及び南側が調査区外のため、果して屈曲して南走するものなのか、或は南側に部分的に張り出しただけで、そのまま西走するものなのかは確定し得なかった。またこの南走する部分と後述するSD169溝跡の方向がほぼ一致すること、及び西走部分と南走部分との深さがほとんど変わらないことは、本溝跡が本

区で屈曲して西走する可能性を示唆しているといえる。が、その反面SD169溝跡と比べた場合、その深さにおいて約20～30cmの隔りがあり、一般にSD169溝跡と本溝跡の南走部分とを同一のものとするには躊躇せざるを得なく、そうであれば上述の可能性は半歩後退することになろう。

6区での本溝跡の規模は上面幅約50cm、底面幅30～40cm、深さ30cmを測るやや幅の狭いものである。断面形はU字状を呈する。溝内堆積土は底部の黒色土或はローム土を混入した黒褐色土と、その上層の溝内堆積土の大半を占める黒色土からなっている。

7区における本溝跡の規模は、上面幅約70cm、底面幅30～40cm、深さは確認面より約30cmを測る。本区は6区と僅か6mしか離れておらず、また溝跡の規模・方位などはほぼ一致することからSD168溝跡の東延長部分に間違いないといえる。しかしそうした状況に反し、7区における本溝跡はその西側でなだらかに立ち上がってしまうのである。

南北1.3m、東西1.8mほどの調査区の南東部分より延びてきた溝跡は、東壁際より0.8mほどでなだらかに立ち上がりはじめ、約1.2mで途切れてしまう。従って本溝跡と6区のSD168溝跡とを結びつけることには僅かながら消極的にならざるを得ないのである。

この原因は、確認面が溝本来の掘り込み面よりも低くなっていることとともに、溝自体が一貫してしっかりと掘り込まれたものではなく、部分的には粗雑に構築されたままであることによるといえる。後述するSD175溝跡やSD182溝跡もこのようなやや粗雑に構築されたものの部類に属する。よって現況においてはつながらない部分が存在するが、同一の溝跡と認定してよいものと考えられる。

なお溝内堆積土は6区において認められた状況とほぼ等しい。

#### SD169溝跡（第21図、図版7～8）

6区（僧寺中軸線の東42～44m、北563～568m）において発見された。僧寺中軸線に対して15.3度東偏する南北方向溝である。上述のように、その南側はSD168溝跡と接するが、重複することなく終わっている。従って現況では両者の新旧関係を求めることはできない。また端部はなだらかに立ち上がるのではなく、比較的角度を有しており、その立ち上がりが意図的になされたことを示している。

規模は、上面幅80～90cm、底面幅40～60cm、深さ約30cmを測り、SD168溝跡に比べやや幅広になっている。断面形は逆台形を呈する。底面は割合と平坦である。本溝跡は今調査された溝跡の中で最もしっかりしたものの部類に属している。溝内堆積土は黒色土粒、ローム粒或は褐色土を含む下層の黒褐色土と、黒色土粒を多く含みやや黒味を増す上層の黒褐色土とに大別されるが、構築に2期あった可能性がある。

なお後述するSD174溝跡とつながるものと考えられる。

#### SD170 溝跡 (第22図、図版9)

17区(僧寺中軸線の東43～45m、北607～609m)において発見された東西方向溝である。僅かに北に偏しているが、ほぼ僧寺中軸線の東西方向と一致している。

規模は、上面幅220～250cm、底面幅約40cm、深さ最大75cmを測る。概ね3段に掘られており、下底面より30cmと55cmほどのところで外底の幅をやや強める。断面形は上・中段部分で逆「ハ」字状となり、下段部分で逆台形を呈している。下底面は比較的平坦であるが、西側に比べて東側では約10cm低い。

溝内堆積土はローム土及びロームブロックを混入する黒褐色土(9・10・11層)、暗味の強い暗黒褐色土(6・7・8層)、ややしまりに欠ける黒褐色土(3・4・5層)とローム粒及びスコリア粒を多く含む明度の高い明黒褐色土(1・2層)に大別し得るが、西側では部分的に暗黒褐色土層とその上層の黒褐色土層との間にローム土及びロームブロック或は茶褐色土を混入した暗黒褐色土層が認められており、従って都合5回の堆積順序が考えられる。このうち少なくとも部分的に認められる暗黒褐色土層とその上層の暗褐色土層(3・4・5層)とは人為的な埋めもどし土と考えられる。

溝跡側壁面に設けられた小穴は、僅かにずれてはいるがほぼ対峙する状態を呈している。しかし意図的に設けられたものかどうかは、調査範囲が小さいため判断を下し難い。小穴内の堆積土は溝内堆積土の7層と等しい暗褐色土であった。

なお今回調査された溝跡の中でこのSD170溝跡が最も安定した形状を呈している。

#### SD174 溝跡 (第22図、図版10)

22区(僧寺中軸線の東71～75m、北634～635m)と37区(同東87～90m、北657～658m)において検出された、やや東偏する南北方向溝である。22区においては26度、37区においては24度東偏している。

22区にあっては、その規模は上面幅最大250cm、底面幅15～40cm、深さ最大75cmを測る。断面形はやや不整な逆台形を呈する。側壁面の小穴は西側で数点を認めるにすぎない。

溝内堆積土は両区部分ともほぼ同様の状況を呈している。すなわち、上層の黒褐色土(22区土層断面図の1層。以下同図による)、暗味を増しローム粒を多包する黒色土(2～10層)とローム土及び茶褐色土を混入してしまりのある黒褐色土に大別される。これらの堆積土の差異は構築時期の違いを示すものであり、つまり11～12層のA期→2～10層のB期→1層のC期という3期にわたる構築が考えられる。

6区におけるSD169溝跡は僧寺中軸線に対して約15度東偏するが、C地区系統及びD地区系統の東西方向の試掘溝ではその北側延長部分は認められなかった。しかしこのSD174溝跡の南側延長上にはSD169溝跡が位置する。更にSD169溝跡より北にある南北方向溝の中では本溝跡が最も西側にある。これらのことから、本溝跡とSD169溝跡とはつながるものと考えられる。しかし22区と37区を結ぶ北側延長上には溝跡の存在を認めることはできなかった。

#### SD176 溝跡 (第21図、図版9)

8区(僧寺中軸線の東79~82m、北556~557m)において発見された。僧寺中軸線に対して67度西偏する東西方向溝である。本溝跡はその延びる方向から考えて、先述のSD168溝跡につながるものといえる。

規模は、上面幅60~70cm、底面幅約30cm、深さ最大28cmを測る。断面形は逆台形乃至はやや扁平なU字形を呈する。溝内堆積土は、茶褐色土を混入する下層の黒色土と、ローム粒を混入しやや軟質の上層の黒色土からなっている。こうした状況はSD168溝跡の状況と合致するものである。

SD168溝跡とSD176溝跡とを結ぶ延長線上において、試掘調査対象部分となったD地区系統の11区東側では、2~3mの長さにわたってIV層まで攪乱を受けていた。従ってSD168溝跡が東西方向をとり続けて延びているものなのか、或は6区において南側に折曲するものなのかは残念ながら把握することはできなかった。

#### SD175 溝跡 (第23図、図版11)

38区(僧寺中軸線の東93~96m、北657~658m)において発見された。SD174とはほぼ平行に走行する南北方向溝である。

この溝跡は断面が浅い皿状を呈しており、その立ち上がりはなだらかであり、上端部を捉えるには極めて困難であったが、東側において溝内堆積土がII層を切っており、それを境として外方にIIIb層が残存している状況を確認した。西側ではこのIIIb層に注目し、溝跡の西端を理解した。そうすると、本溝跡の規模は、上面幅約365cm、底面幅約20cm、深さ最大50cmとなる。

溝内堆積土は上層の黒褐色土と下層の黒色土とに大別されるが、いずれもしまりがよく、特に最下部に位置する7層の上面から地山III層の上面にかけては硬質となっている。

本溝跡の南北延長線上には、これとつながる溝跡は認められなかった。

#### SD182 溝跡 (第23図、図版11)

26区(僧寺中軸線の東100~101m、北628~629m)と39区(同東102~104m、北657~658m)において発見された、南北方向溝である。

ところが本溝跡は、小溝とその埋没後東側に構築された溝からなり、2期にわたる構築が認められる。

26区にあっては、僧寺中軸線に対して15.5度西偏する。先行溝の掘り込みの方が浅く、従って西側では2段状を呈している。規模は上面幅110cmを測るが、後出溝は上面幅約85cm、底面幅50~60cm、深さ約25cmとなる。

39区にあっては、26区同様西側で2段状を呈している。が、その方位は26区とは異なり、僧寺中軸線とはほぼ一致している。従って、少なくとも、西側に弧状を描いて延びているものと考えら

れる。恐らくはこの部分に限らず本溝跡は蛇行を繰り返して走行するものと推測される。本区での規模は、上面幅最大 115cm を測るが、後出溝は上面幅約 85cm、底面幅 40～60cm、深さ約 20cm となっている。

溝内堆積土は 26 区、39 区で認められた状況ともほぼ等しい。すなわち先行溝、後出溝ともに黒褐色土を基調とするが、後者にはより多くの黒色土粒が含まれている。いずれの堆積土もローム土或は茶褐色土の混入はみられず、ほぼ均一的な状態を呈することから、人偽的な埋土とは考え難い。また両者の掘り込み面には明確な相異があり、つまり前者がⅢ層上面から掘り込まれているのに対し、後者はⅡ層上面からなされている。唯し先行溝の堆積土の上面とⅡ層とはかなり類似しており、その掘り込みがⅡ層中程に求められる可能性はある。

本溝跡の南北延長部分において、直接につながる溝跡は検出されなかった。しかし北側において次に述べる SD 181 溝跡が極めて近くに位置している。ところがその形状、規模或は溝内堆積土が異なっており、本溝跡と SD 181 溝跡とを結びつけることはできないと考える。

#### SD181 溝跡（第 23 図、図版 12）

45 区（僧寺中軸線の東 103～104m、北 720～722m）において発見された南北方向溝である。僧寺中軸線に対し 14 度東偏する。

概ね 2 段に掘り込まれており、その規模は上面幅 100～140cm、中段幅 55～68cm、底面幅 40～50cm、深さ約 55cm を測る。下部部の深さは 20～25cm である。断面形が逆台形或は扁平な U 字形の下部部より、逆「ハ」字状に上段部は立ち上がる。下底面は比較的平坦である。割合にしっかりと掘られているものの部類に属すといえる。また掘り込みはⅡ層からなされ、Ⅳ層まで達している。

溝内堆積土はいずれも黒褐色土を基調として、包含粒子等により細分されるが、ほぼ均一の状態を呈している。またローム土或は茶褐色土を混入する層もあるが、混入の程度は低く埋土的な様相は認められない。

上述したように、SD182 溝跡の北側延長部分が本溝跡と近接するが、諸種の状況から異なったものと考えられる。逆に本溝跡の方位に従って南方向に延長すると、37 区の SD174 溝跡の西或は 22 区の SD174 溝跡の東側にくる。SD174 溝跡と本溝跡とを比べた場合、やはり相異点が多く直接結びつくとは考え難い。しかし SD174 溝跡と結びつくと考えた 6 区所在の SD169 溝跡と比べた場合、本溝跡の方がやや規模において上回っているとはいえ、その形状は類似している。これをもって本溝跡と SD169 溝跡—SD174 溝跡とを同一のものとするのは早急であろうが、全体的な状況のもとではその可能性は払拭することはできないといえる。

#### SB75・76 掘立柱建物跡（第 24 図、図版 13）

11 区において検出された。北側のものを SB75 掘立柱建物跡、南側のものを SB76 掘立柱建物

跡とする。その位置関係から、両者は重複するものであり、同時に存在したものでないことは明らかである。

本来の調査区は東西5m、南北1.1～1.8mほどのものであったが、比較的掘り込みの深い小穴が併列することから、掘立柱建物跡の可能性が高まったのである。そこで南側に約3.5m拡大したところ、柱穴の存在が認められ、その可能性は確定的となった。更に南側に柱穴間と等距離にあたる位置に試掘坑を設定して精査したが、柱穴の存在は認められなかった。このことから二軒の掘立柱建物跡は共に東西方向建物であると推測される。

なお拡張部分については、工事の対象外となるため、平面的調査に留めた。

SB75 掘立柱建物跡は僧寺中軸線の西62～65m、北574～577mに位置する。建物跡の南北方向は僧寺中軸線に対し約12度西偏する。桁行・梁行ともに1間ずつしか確認されなかった。柱間は桁行が2.7m、梁行が3.4mである。柱穴は径35～40cm前後の不整形円形であり、深さは35～55cmである。

SB76 掘立柱建物跡は僧寺中軸線の西63～66m、北573～576mに位置する。建物跡の南北方向は僧寺中軸線に対して約17度西偏する。SB75 掘立柱建物跡と同様、桁行と梁行はともに1間ずつしか確認できなかった。柱間は桁行が2.8m、梁行が2.6mであり、SB75 掘立柱建物跡と比べると梁行がやや狭い。柱穴は径30～40cm前後の不整形円形である。

掘立柱建物跡を予期しなかったための調査の不備から、完掘した柱穴中の柱の痕跡を捉えることはできなかった。各柱穴内堆積土は、黒褐色土を主体とするもので、ローム土の混入を認められる。

#### SK738 土坑（第24図、図版13）

64区にあり、僧寺中軸線の東247m、北459mに位置し、SI304住居跡の北にあたる。

北東—南西方向に長軸をとり、上面幅は長軸52cm、短軸36cm、底面幅長軸47cm、短軸30cmを測る。平面形は楕円形を呈する。南西隅が小穴により切られている。深さは最大13cmほどである。南側に比べて北側の壁の立ち上がりはややなだらかである。

堆積土は黒色土の単一層である。

遺物は土師器の小破片4点が出土したのみである。

#### SK739 土坑（第24図、図版14）

65区にあり、僧寺中軸線の東227m、北469mに位置する。SI305住居跡の北西にあたる。

上面幅東西1.2m、南北1.6m、底面幅東西1.0m、南北1.4mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。長軸はほぼ僧寺中軸線南北方向に等しく、またSI305住居跡の南北方向とも一致する。深さは最大15cmと浅く、北に行くに従い、徐々に低くなっている。深さの割には掘り込みは安定している。

堆積土は茶褐色土をやや混入する上層（1層黒色土）と、しまりのよい下層（2層黒色土）からなる。

遺物は土師器、瓦、礫などが出土したが、いずれも小破片である。また遺物は上層の堆積土に包含されていた。

#### SK 740 土坑（第 24 図、図版 14）

2 区にあり、僧寺中軸線の東 42 m、北 521 m に位置する。

上面幅東西 90 cm、南北 80 cm、底面幅東西 80 cm、南北 70 cm の不整な円形を呈する。北及び北西部分に小穴を有する。深さは約 18 cm で、底面は平坦である。掘り込みは垂直に近い状態でなされている。

堆積土は黒褐色土を主体とし、下層はローム土を混入する。

遺物は認められなかった。

#### SK 744 土坑（第 24 図、図版 15）

3 区にあり、僧寺中軸線の東 43 m、北 538 m に位置する。

上面径約 80 cm、底面径 60～70 cm のやや角張った円形を呈する。深さは最大 22 cm で、底面はほぼ平坦である。

堆積土は黒褐色土の単一層である。

遺物は認められなかった。

#### SK 755 土坑（第 24 図、図版 15）

42 区にあり、僧寺中軸線の東 72 m、北 233 m に位置する。

上面幅東西 0.9 m、南北 1.7 m、底面径東西 0.8 m、南北 1.5 m の隅丸長方形を呈する。深さは約 17 cm である。底面の北側がやや下がっている。

堆積土はローム粒・スコリア粒のやや多い上層（1層黒褐色土）と、しまりのよい下層（暗褐色土）からなる。

遺物は認められなかった。

#### SK 757 土坑（第 24 図、図版 15）

46 区にあり、僧寺中軸線の東 76 m、北 821 m に位置する。

上面幅東西 120 cm、南北 95 cm、底面幅東西 105 cm、南北 75 cm を測り、隅丸長方形を呈する。深さは最大 16 cm ほどと浅く、底面にはやや凹凸がある。

堆積土は黒茶褐色土の単一層である。

遺物は破砕礫が数点出土したのみである。

#### SK 766 土坑

24 区にあり、僧寺中軸線の東 93 m、北 634 m に位置する。

東側の一部が未掘であるが、南北の上面幅 99 cm を測る不整形円形を呈する。深さは 14 cm 前後である。

堆積土は黒色土の単一層である。

遺物の出土はなかった。

#### SK 767 土坑

15 区にあり、僧寺中軸線の東 53 m、北 605 m に位置する。

北側が未掘のため全体の規模は不明であるが、東西の上面幅は最大 1.3 m を測る。深さは 16 cm 前後である。平面形はかなり不整形な楕円形を呈するものと考えられ、また底面の凹凸も激しい。

堆積土は黒色土の単一層である。

遺物の出土はなかった。

#### SK 797 土坑

12 区にあり、僧寺中軸線の西 79 m、北 576 m に位置する。SB75・76 掘立柱建物跡の西にあたる。

調査面積の都合上完掘できず、その規模を捉えることはできなかったが、状況から判断して、先述の SK739 土坑を上回るものと推測される。平面形は楕円形もしくは不整形な隅丸長方形を呈するものと考えられる。深さは 12 cm 前後である。

堆積土は黒色土粒を含む上層（1 層黒褐色土）と、1 層に類似するがより明るく、又ローム粒も多く混入する下層（2 層黒褐色土）からなる。

遺物は認められなかった。

#### SK 798 土坑

12 区にあり、僧寺中軸線の西 77 m、北 576 m に位置する。

東及び南側が未掘のため、規模・形状については不明である。深さは 9 cm 前後と浅い。

堆積土は黒褐色土を主体とし、黒色土粒を多く含む上層と、明るさのある下層とに分けることができる。

遺物の出土はなかった。

#### SX34 不明遺構（第 25 図、図版 16）

50・51・52 区において認められた。僧寺中軸線の東 145～157 m、北 721～730 m に位置する。



本部分は構築物の痕跡ではなく、その堆積土に特徴がある。すなわち表土層下に漆黒色の層（1・4層）があり、その下に赤味を強く帯びた茶褐色土層（2・3・5層）がある。これらは通常認められるⅡ層及びⅢ層とは異なっている。つまり、黒色土層においては、黒色土粒がほとんど認められず、しまりは非常によい。更に茶褐色土にあつては均一的な色調を呈し、しまりがよいことに加え、最大の特徴は葉屑状の有機質の物質を混入していることである。この物質が何であるのかは不明である。

この堆積層と通常の堆積土との境は漸移的であるが、不明物質の混入及び色調によって区分した。50区においては調査区全体にこの堆積土が認められたが、51区では西側に限られ、52区では西側を中心に北西-南東方向に斜走する状態で認められた。また50区の3m北側に試掘坑を設けたが、通常の堆積土であった。従つて50区南東隅と52区北東隅とを結ぶ北西-南東方向が、このSX34不明遺構の方位と考えられる。しかし51区では西半のみにしか認められないことは、この堆積層の形成が決まった範囲においてのみなされたものではないことを示しており、それはまたSX34不明遺構の性格の一端を表している。

少くとも、このSX34不明遺構は自然的作用の結果であると考えられる。更に言うならば、この地点の南東には開折谷が入り込んでおり、地形はそれに向かつて傾斜していることから、SX34不明遺構は流水の結果であると理解できないであろうかと考える。

今後こうした堆積層の類例の出現を待つて、改めてその性格について考えることにしたい。

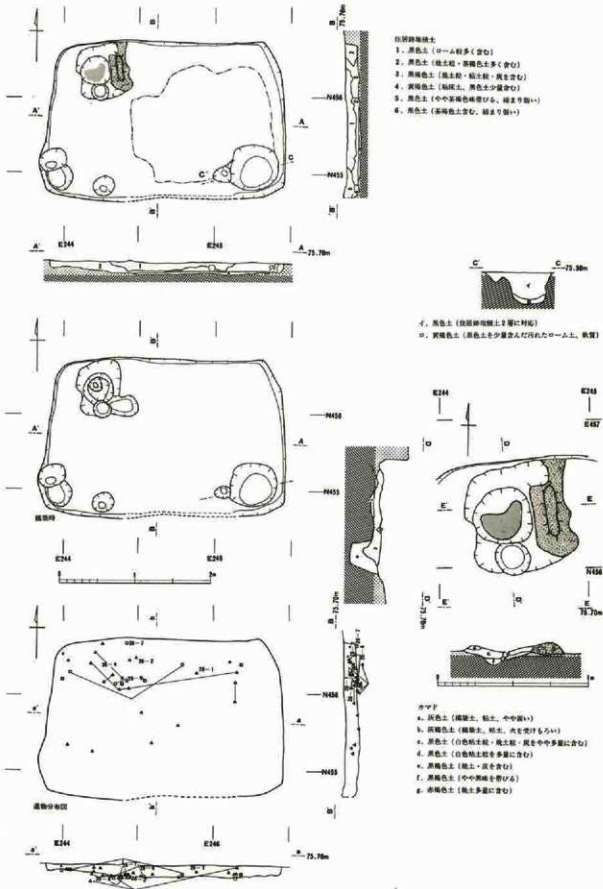
## 小 穴

20の調査区において大小多数の小穴が検出された。総計77個を数える。掘立柱建物跡が検出された12区では21個と最も多く全体の27%を占めているが、その他ではこのような群集する傾向は認められなかった。

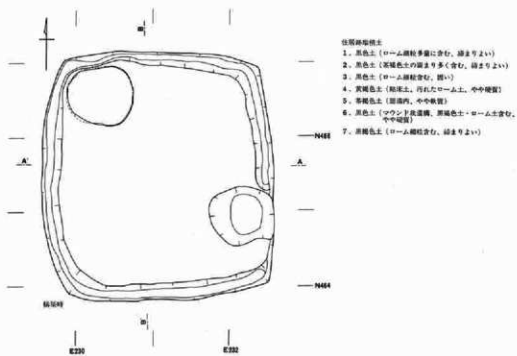
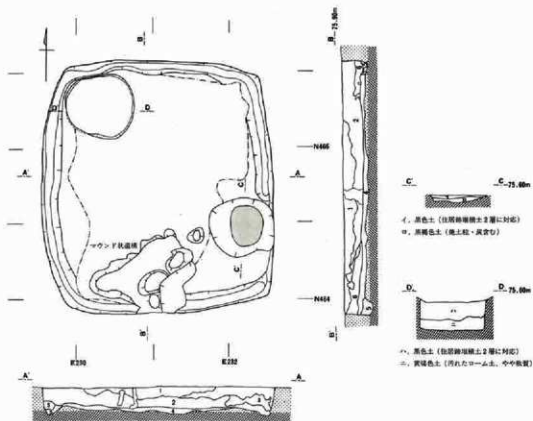
規模は概ね径20～60cm、深さ10～60cm前後である。平面形はいずれも円形或はそれに近い形状を呈している。堆積土は黒色土ないしは黒褐色土で、黒色土粒を混入するものが多い。

これらのうち、12区所在の小穴は上述したようにその大半が平面的調査に留まったため詳細は不明であるが、別の掘立柱建物跡の一部になる可能性は有している。しかしこれ以外的小穴はいずれも構築物の柱穴になることは考え難いものである。

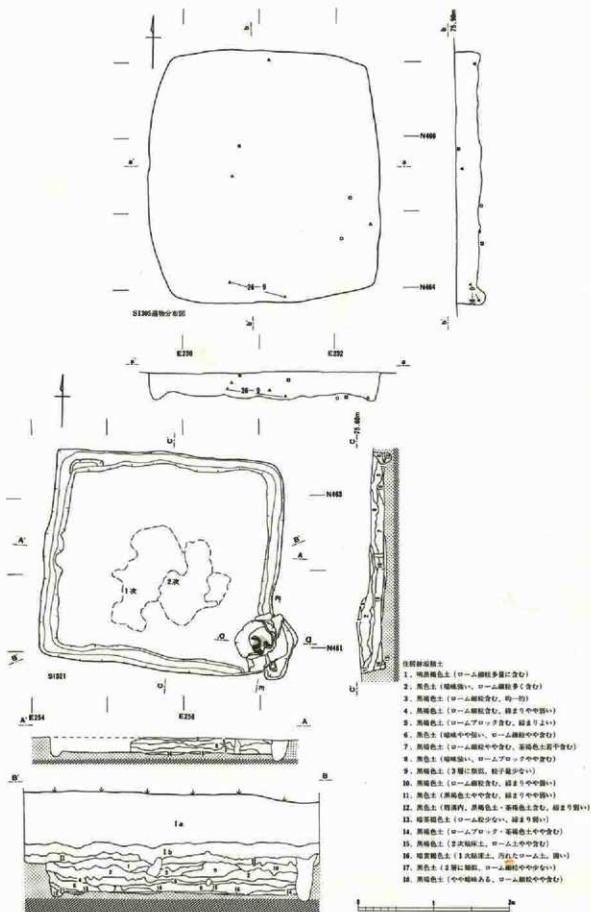
第17図 SI 304住居跡実測図



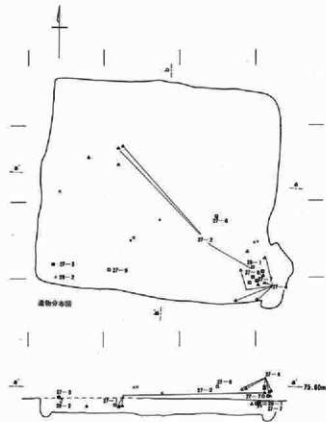
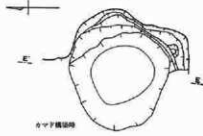
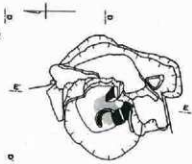
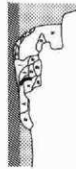
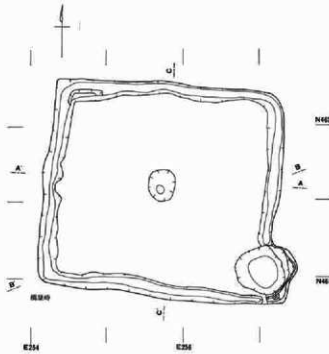
第18図 SI 305住居跡実測図



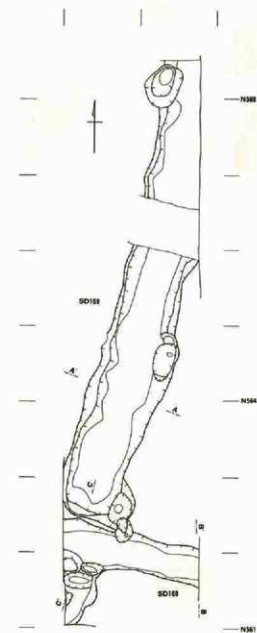
第19図 SI 305・321住居跡実測図



第20図 SI 821住居跡実測図



- a. 噴黄緑色土 (赤褐色土層状土、粘土質・自然砂土層を含む)
- b. 噴黄緑色土 (粘土質・ローム状少量含む)
- c. 噴黄緑色土 (土層に閉じ、泥化層・粘り層少量を含む)
- d. 噴黄緑色土 (噴黄土層状土、黄色粘り層・黄土・自然砂土層を含む)
- e. 赤褐色土 (粘土多量に含む、硬い)
- f. 赤褐色土 (泥化層少量に含む)
- g. 噴黄緑色土 (赤褐色土を含む、硬さ中程度)
- h. 赤褐色土 (泥化層少量に含む、ローム少量含む)
- i. 噴黄緑色土 (赤褐色土を含む、硬さ中程度)
- j. 赤褐色土 (ローム少量含む、硬さ中程度)
- k. 噴黄緑色土 (硬粘土、中程度にローム土、硬さ中程度)
- l. 噴黄緑色土 (硬粘土、土層に閉じ、赤褐色土中多量含む)
- m. 噴黄緑色土 (硬粘土、赤褐色土多量含む、硬さ中程度)
- n. 噴黄緑色土 (硬粘土、赤褐色土以上と土層多量含む、硬さ中程度)
- o. 赤褐色土 (硬粘土、赤褐色土多量含む)
- p. 噴黄緑色土 (硬粘土、赤褐色土多量含む)
- q. 噴黄緑色土 (硬粘土、ローム少量含む、硬さ中程度)
- r. 赤褐色土 (硬粘土、ローム土中程度、硬さ中程度)
- s. 噴黄緑色土 (硬粘土、ローム土多量に含む、硬さ中程度)
- t. 赤褐色土 (硬粘土、硬さ中程度)
- u. 噴黄緑色土 (硬粘土、硬さ中程度)
- v. 噴黄緑色土 (硬粘土、硬さ中程度)
- w. 噴黄緑色土 (赤褐色土多量、硬さ中程度)
- x. 噴黄緑色土 (ローム土・粘土少量含む、硬さ中程度)
- y. 噴黄緑色土 (ローム土多量に含む、硬さ中程度)
- z. 噴黄緑色土 (ローム土少量含む、硬さ中程度)



A' A-77.30m



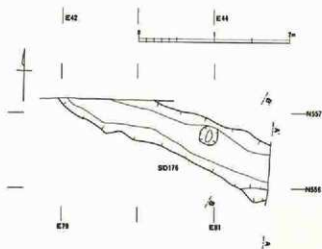
C' C-77.30m



1. 黒褐色土 (黒色土粘り多し)
2. 黒褐色土 (黒色土粘・ローム粘少量含む)
3. 黒褐色土 (内れたローム土含む)
4. 黒色土 (ローム粘少量含む、硬まりあり)
5. 明褐色土 (黒色土含む、硬まりあり)
6. 明褐色土 (ローム土含む)



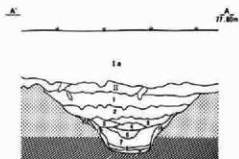
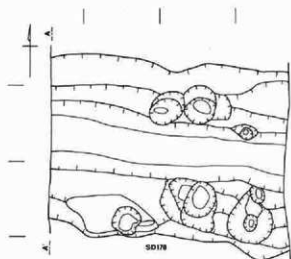
1. 黒色土 (ローム粘り多し含む、均一粘)
2. 黒色土 (茶褐色土少量含む、硬まりあり)



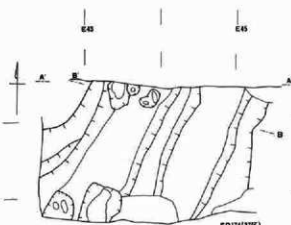
A' A-77.40m



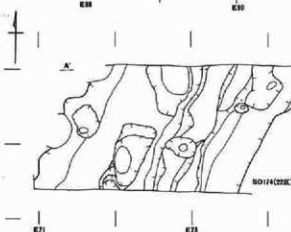
1. 黒色土 (ローム粘り含む、やや硬質)
2. 黒色土 (茶褐色土含む)



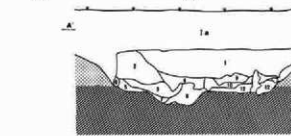
1. 褐色腐色土 (ローム粒多(含む)、結まり強+)
2. 褐色腐色土 (ローム粒・ロームアロップ多(含む)、結まり強+)
3. 黒腐色土 (ローム粒少ない、結まり中強+)
4. 黒腐色土 (3層に類似、ローム粒少ない)
5. 黒腐色土 (結まり強+)
6. 褐色腐色土 (ローム粒少量含む、結まり強+)
7. 褐色腐色土 (ローム粒含む、結まり強+)
8. 褐色腐色土 (7層に類似、ローム粒少量含む)
9. 黒腐色土 (ロームアロップ含む)
10. 黒腐色土 (ローム土・ロームアロップ多(含む))
11. 黒腐色土 (ロームアロップ少量含む、結まり中強+)
12. 茶褐色土 (ローム粒少量含む)

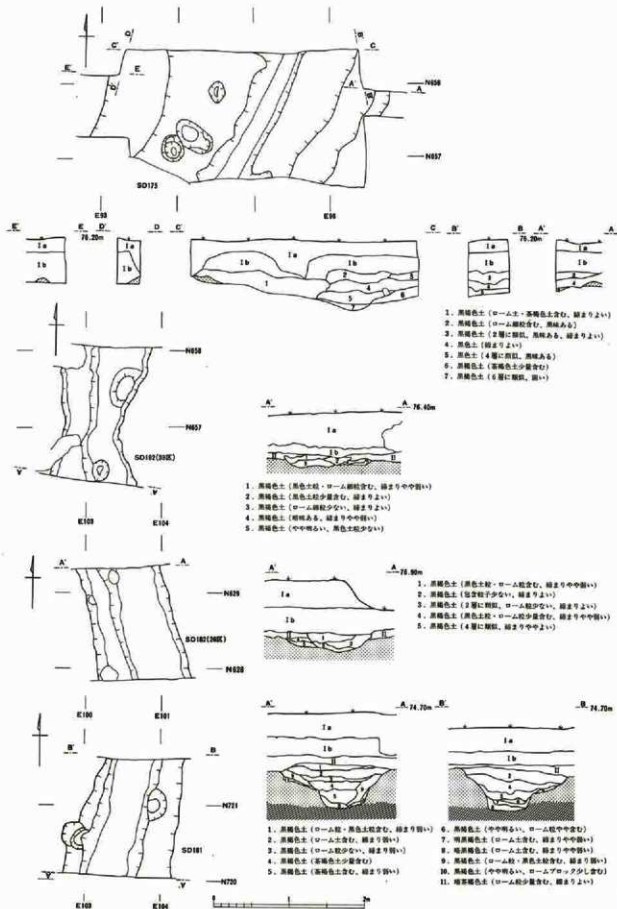


1. 黒腐色土 (ローム粒少量含む、結まり強+)
2. 黒腐色土 (ローム粒中多+)
3. 黒腐色土 (ローム粒少量含む、中強+)
4. 黒腐色土 (3層に類似、結まり強+)
5. 黒腐色土 (ローム土少量含む、結まり強+)
6. 黒腐色土 (5層に類似、ローム粒含む)
7. 黒腐色土 (ロームアロップ少量含む、結まり中強+)
8. 腐植色土 (腐植色等少な、結まり強+)
9. 黒腐色土 (類似強、結まり強+)
10. 黒腐色土 (ローム土少量含む、強+)
11. 黒腐色土 (3層に類似、結まり強+)
12. 褐色腐色土 (ローム土少量含む、結まり強+)



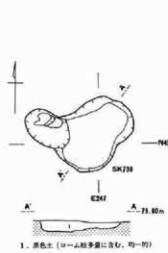
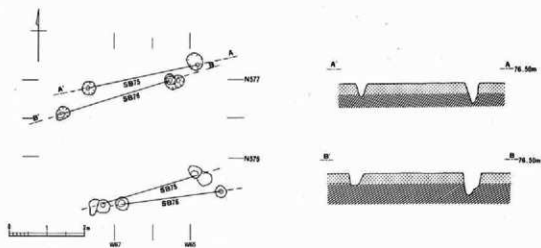
1. 黒腐色土 (ローム粒含む)
2. 黒腐色土 (ローム粒少量に含む、中強+)
3. 黒腐色土 (ローム粒少量含む、中強+)
4. 黒腐色土 (類似強、ローム粒少ない、中強+)
5. 黒腐色土 (ローム土多(含む)、結まり強+)
6. 黒腐色土 (類似強弱、結まり強+)
7. 黒腐色土 (ローム土含む、中強+)
8. 黒腐色土 (5層に類似、ローム土中強+)
9. 黒腐色土 (ローム粒多(含む))
10. 黒腐色土 (4層に類似、ローム粒少ない)
11. 腐植色土 (ローム土、内れ茶褐色土含む)
12. 黒腐色土 (ローム土含む、結まり強+)



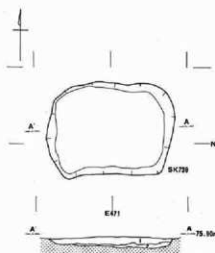




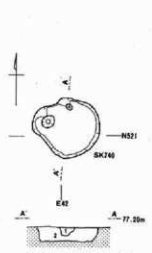
第24圖 SB75・76獨立建物跡、歴史時代土坑実測図



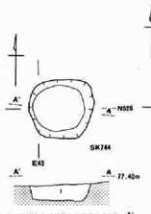
1. 赤色土 (0—A線手前部分含む、均一質)



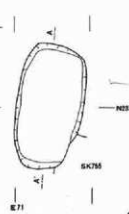
1. 赤色土 (黒褐色土・0—A線部分含む)  
2. 赤色土 (緑より2+)



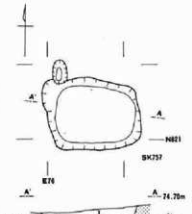
1. 赤色土 (赤色土粒多量に含む)  
2. 赤色土 (均れた0—A土含む)



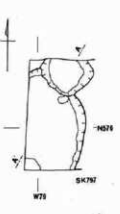
1. 黒褐色土 (赤色土粒多量に含む)



1. 黒褐色土 (0—A線前・赤色土粒含む)  
2. 緑褐色土 (緑2号2+)



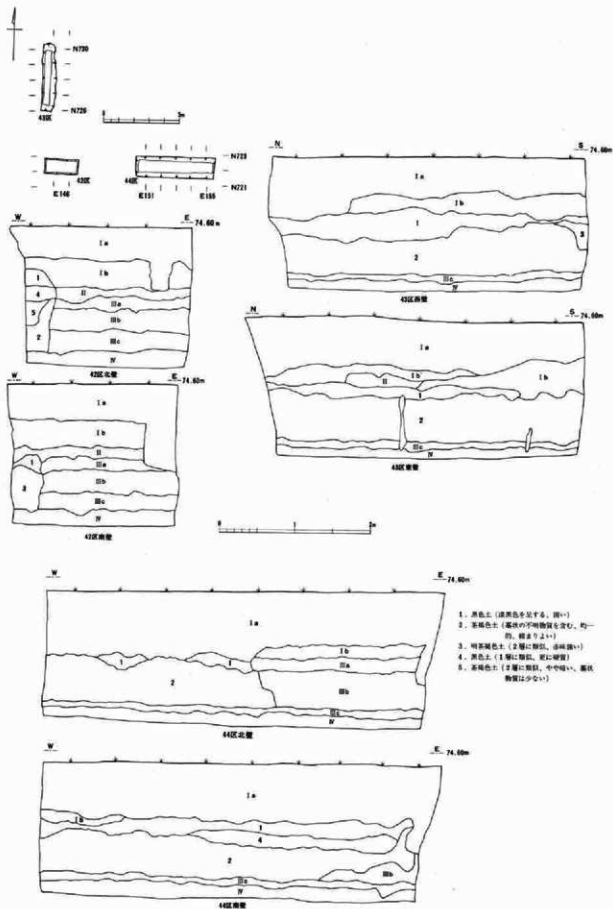
1. 黒褐色土 (0—A線・赤色土粒含む)



1. 黒褐色土 (0—A線・赤色土粒含む、緑より2+)  
2. 赤褐色土 (0—A線・赤色土粒少量含む)  
3. 赤色土 (赤色土粒多量に含む)  
4. 赤褐色土 (3層にわたる、赤色土粒少量)



第25図 SX34不明遺構実測図



## V 出 土 遺 物

本調査により出土した歴史時代の遺物には、土器・瓦・石製品・金属製品などがある。総量はコンテナ4箱ほどであり、その多くは住居跡・土坑などから出土している。

遺物の記述は全て一覧表によったが、表記の方法について以下に補足説明をする。

### (1) 各遺物共通

- イ. 遺物番号は、図面番号と対照にした。例えば「26-1」とあれば「図面26-1」を示す。
- ロ. 出土位置の内、「カマド」はカマド構築土崩壊土及びカマド覆土、「カマド内」はカマド構築土内出土。「床直」は床面直上。
- ハ. 計測値 記号なしは完数値、〔 〕は復原数値、( )は残存数値、——は計測不可を表わす。単位はcm。

### (2) 土器類

- イ. 種別 土：土師器、須：須恵器、灰：灰釉陶器、緑釉陶器  
ただし、須恵器坏・埴は還元焙焼成のものを須A、酸化焙焼成のものを須Bとした。

### (3) 瓦

鏡瓦（本報告にないので省略）

字瓦（                      ）

男瓦・女瓦

- イ. 布目本数 3cm四方内での側端縁に平行する糸数と狭・広端縁に平行する糸数を表わす。
- ロ. 縄甲き目本数 3cm四方内での縄数を表わす。
- ハ. 縄の撚り L：縄圧痕が右上り左下りの傾斜をなすもの  
R：縄圧痕が左上り右下りの傾斜をなすもの
- ニ. 粘土板合せ目 佐原真氏の「平瓦桶巻き作り」での分類S・Zによる。
- ホ. 布合せ目 粘土板合せ目の分類S・Zに準ずる。
- ヘ. 叩き締め円弧 A：叩き締め円弧が一方のもの  
B：叩き締め円弧が「ハ」字状をなすもの

S I 304 住居跡 土器 一 覧

図 面 遺 物 番 号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 高 底 高 台高	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
26-1	土師質一 杯	覆土	(11.6) (1.75)	口縁部端が僅かに外反する。	内外面ロクロ調整。口唇部に 指ナデ。	口縁部1/8残存。赤色ス コリア状物質含む。黒褐 色～淡赤褐色。
26-2	土師質一 杯	カマド	— (1.95) (5.60)	底部から体部にかけてやや外 反しながら立ち上がるが、内 面での移行はなだらかである。 底部は厚い。	回転糸切りのもち軽いナデ。 体部は内外面ロクロ調整。	底部1/3残存。砂粒含む 淡赤褐色。黒斑が認めら れる。
26-3	土師質一 杯	覆土	— (1.40) (5.20)	底部は僅かに上げ底になる。 内面はなだらかに立ち上がる。	回転糸切り。体部との境に指 ナデ。	底部1/5残存。赤色ス コリア状物質含む。焼成や や不良。赤褐色。
26-4 図版21	土一葉	カマド	(19.1) (12.3)	口縁部は「く」の字状に屈曲 する。胴部の張りはやや弱い。 最大径は口縁部と胴部やや上 半とにある。	口縁部及び胴部上半では指お さえ。胴部では中程やや上よ りヘラ削り。内面は口縁部よ りヘラナデ。	口縁部～胴部上半1/5残 存。砂粒・小石を含む。 赤褐色。

S I 304 住居跡 男 瓦 ・ 女 瓦 一 覧

図 面 遺 物 番 号	出 土 位 置	瓦端 広端 全長 厚さ	成 ・ 整 形 の 特 徴					備 考	
			素 材	布 目	特 徴	叩 き	特 徴		特 徴
26-5 図版21	カマド	(13.2) — (10.2) 1.40	—	23×22	狭端、左側端縁 はともに幅広く ヘラ削り。	縦目L 10本	狭端縁は幅広く ヘラ削り。左側 端縁はナデ。	狭端、左側端は 一面ヘラ削り。	粗砂粒を多く混入。 硬質。青灰色～暗青 灰色。
26-6 図版21	カマド 覆土	— (9.58) 2.80	—	13×16	側端縁不調整。	縦目R 7本	—	側端は指ナデ。	粗砂粒を混入。硬質 明青灰色。
26-7 図版21	覆土	— (14.6) (17.2) 2.40	粘土煎	33×34	広端、右側端縁 とも幅広くヘラ 削り。	縦目L 12本	広端幅は狭くヘ ラ削り。縦目叩 き(形)。	広端はナデの ちヘラ削り。右 側端は指ナデ。	凹面右側端に成形台 狂痕あり。粗砂粒を 多く混入。硬質。

S I 305 住居跡 土 器 一 覧

図 面 遺 物 番 号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 底 高 台高	器 形 の 特 徴	成 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
26-8	須A一 杯	覆土	(13.1) (2.60)	僅かに内彎しながら立ち上 がり、口縁部で外反する。口唇 部はやや肥厚する。	内外面ロクロ調整。そのち 内面ナデ。	口縁部1/4残存。砂粒含 む。青灰色。
26-9	土師質一 杯	周溝 マウ ン状 遺 構内	(13.70) (4.80)	やや内彎しながら立ち上 がるが口縁部端で僅かに外反する。 口縁部にかけて器厚を増す。	内外面ロクロ調整。口唇部指 ナデ。	1/3残存。内面刮落著しい。 内外面ともススが付 着し、二次焼成を受けて いることを示す。
26-10 図版21	須A一 杯	覆土	— (2.70)	僅かに内彎しながら立ち上 がる。底部に向かって器厚を増 す。	内外面ロクロ調整。外面の底 部近くで、口縁部方向へのナ デが認められる。	体部1/10の小破片。石英 粒、小石を若干含む。淡 褐色～灰色。

26-11 図版21	須B-杯	覆土	(1.00) (5.70)	底部はほぼ平坦である。	回転糸切り。	底部1/2残存。二次焼成を受け、内外面とも剥落著しい。砂粒若干含む。
---------------	------	----	------------------	-------------	--------	------------------------------------

S I 305 住居跡 石製品一覽

図版番号	種別	出土位置	寸法	備考
26-12 図版21	砥石	覆土	長さ (5.2) 幅 2.9~3.4 厚み 1.1	扁平なコマボコ形を呈している。両端部及び底部を欠失している。現表面(図正面)は全面磨れている。二次焼成を受けている。

S I 321 住居跡 土器一覽

図版番号	種別	出土位置	口徑 底徑 高 台高	器形の特徴	成・整形の特徴	備考
27-1	土師甕一 杯	覆土	〔11.4〕 (3.25)	体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。	内外面ロクロ調整。	1/10残存。赤色スコリア状物質、砂粒含む。焼成やや不良。
27-2	須B-杯	カマド 覆土	(2.80) 5.60	やや厚い底部からは直接に体部は立ち上がる。体部は底部に比べ薄い。	外面ロクロ調整。右回転糸切り。底部端に横位の指ナブ。内面は剥落のため詳細不明。	1/4残存。二次焼成のため内外面とも剥落著しい。小石、砂粒を含む。暗褐色。
27-3	灰-塊	覆土	〔13.6〕 (4.25)	やや内彎しながら立ち上がるが、口縁部で軽く外反する。口縁部は肥厚する。器厚は薄い。	内外面ロクロ調整。体部上半内外面につけ掛け無軸。外部はそのもちハケ状工具で軸線をのぼす。	1/7残存。小石若干含む。赤褐色。無軸部分は灰色。
27-4	土-甕	カマド	〔21.80〕 (18.35)	口縁部は「く」の字状に外反する。最大径は胴部中程にある。胴部はさほど球状を呈さず張りも弱い。	外面は横位ヘラ削りのち胴部下半に縦位ヘラ削り。内面はヘラナデ。	口縁部へ胴部1/3残存。外面にスス、タール状物質が付着。砂粒若干含む。焼成良好。

S I 321 住居跡 男瓦・女瓦一覽

図版番号	出土位置	装端 広端 全長 厚さ	成・整形の特徴				備考		
			材	布目	特徴	叩き特徴			
27-5 図版21	覆土	(5.80) (12.6) 2.15	粘土織	14×17	端縁不調整。	罫目L 8本	端部不調整。	広端面は指ナブのちヘラ削り。右側端部は指ナブ。	小石、微砂粒を多く混入。硬質。黒灰色。
27-6 図版22	覆土	(8.60) (13.2) 2.40	—	20×26	—	罫目L 8本	—	広端面はナブ。	小石、粗砂粒を混入。やや硬質。赤褐色。
27-7 図版22	カマド	(15.1)	粘土織	18×17	装部、左側端縁は幅狭くヘラ削り。	罫目L 11本	装部は幅狭くヘラ削り。	狭端、左側端部は一面ヘラ削り。	小石、微砂粒を少し混入。硬質。明青灰色〜黒灰色。
27-8 図版22	カマド	(9.45) 2.40	—	29×28	側端部は不調整。	罫目L 10本	罫目は小単位。	側端部は指ナブ。	微砂粒をやや多く混入。硬質。暗青灰色。

27-9 図版22	覆土	— (13.2) 2.00	—	25×27	側縁は幅広く へた削り。	正格子	格子目印きは疏。	側端面は二面へ た削り。	赤色スコリア状物質 細線骨針、塵砂粒を 混入。二次焼成を 受けている。
28-1 図版22	カマド	— (7.10) 1.90	粘土紐	22×21	両側端面は幅広く へた削り。	竊目し	内側端面はやや 幅広くへた削り。 竊目印きののち 回転ナデ。	両側端面は一面 へた削り。	布合せ目痕あり。凹 面に判読不明の朱墨 あり。黒色スコリア 状物質混入。硬質。

S I 321 住居跡 鉄製品一覽

図 版 遺物番号	種 別	出 土 位 置	寸 法	備 考
28-2 図版22	釘	覆土	長さ (5.9) 厚み 0.4×0.4	頭部が叩かれており内側に曲がっている。全体も同様に内に曲がっている。先端部は欠失している。

S D 168 溝跡 土器一覽

図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 底 径 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
28-3	須B一壇	覆土	(17.80) (3.40)	口縁部は緩やかに外反する。 口唇部は肥厚する。	内外面ロクロ調整。	口縁部1/8破片。小石を若干含む。灰褐色。

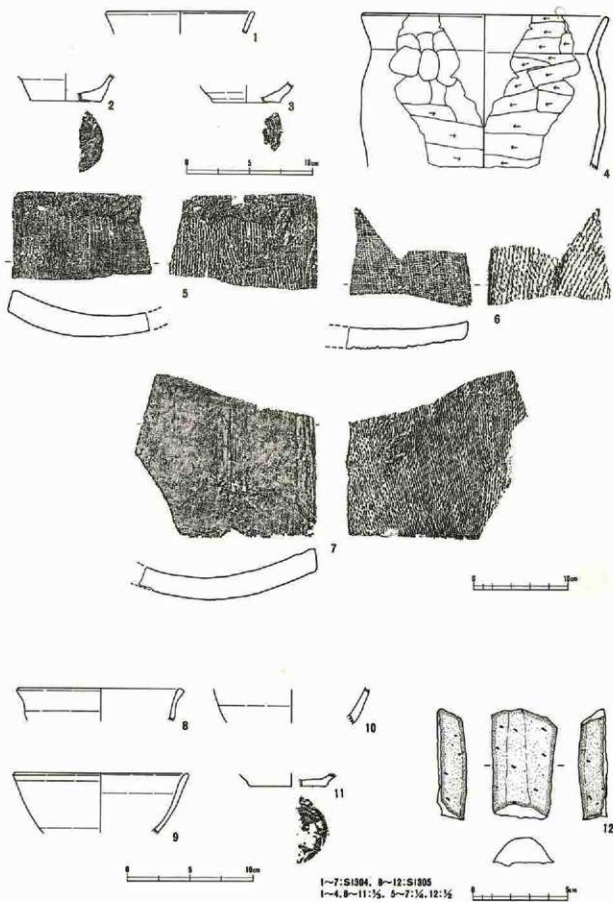
S K 738 土坑 土器一覽

図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 底 径 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
28-4 図版22	須B一壇	覆土	— (3.90) (6.20) (0.20)	底部よりやや内彎しながら立ち上がる。口縁部にかけて薄くなる。高台部は張り出した感じになる。	内外面ロクロ調整。外面は口縁部にかけて横位ナデ。高台部は貼付による。高台部内外面とも横位ナデ。	1/5 残存。砂粒を若干含む。淡赤褐色。

S K 739 土坑 土器一覽

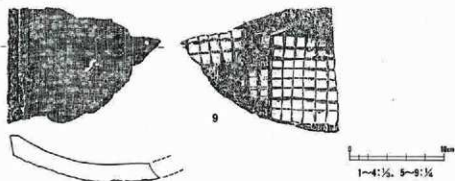
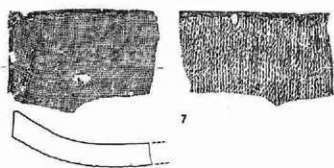
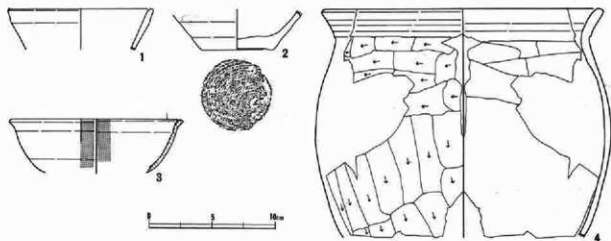
図 版 遺物番号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 底 径 高 台高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考
28-5 図版22	須B一環	覆土	— (1.20) (5.30)	やや上げ底の底部より僅かに内彎しながら立ち上がる。	ロクロ調整。回転糸切りのものナデ。	底部残存。小石を多量含む。焼成やや不良。暗褐色。

遺構外		土 器 一 覧					
図 面 取 遺 物 番 号	種 別 器 形	出 土 位 置	口 径 器 高 底 径 高 台 高	器 形 の 特 徴	成・整 形 の 特 徴	備 考	
28-6	須B-杯	64区II 層	(11.0) (3.20)	僅かに内灣しながら立ち上がる。	内外面ロタロ調整。そのちへラナデ。	1/5残存。白色砂粒含む。橙褐色。	
28-7	土-壺	64区II 層	(14.50) (4.90)	口縁部は短く外反し、器厚を薄くする。	外面は口縁部から頸部に横位指ナデ、そのも頸部以下に横位へラナデ。口縁部内面は横位ナデ。	口縁部1/5残存。小石、砂粒含む。焼成良好。赤褐色。	
28-8 図版22	須B-杯	64区II 層	(1.10) (6.40)	底部は平底で、中央部が僅かに薄い。	四転糸切りのち縁部にへラナデ。体部との接合部に指ナデ。内面ロタロ調整。		

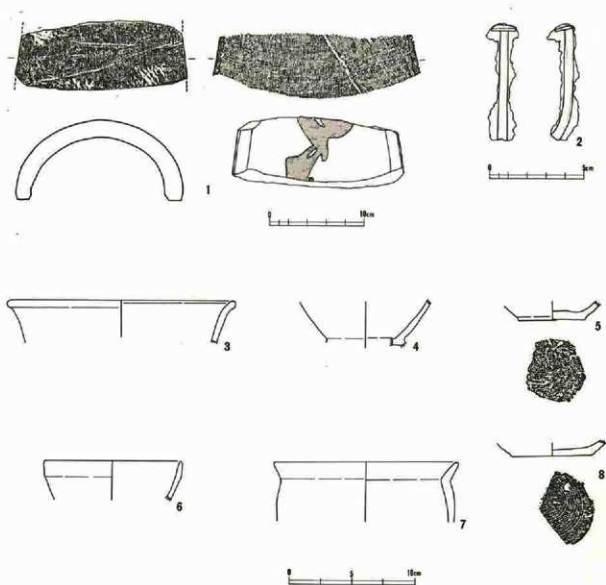




第27図 SI 321住居跡出土遺物



第28図 SI 321住居跡、SD168溝跡、SK738・739土坑、遺構外出土遺物



1-2:SI321,3:SD168,4:SK738,5:SK739,6-8:遺構外  
1:1/4, 2:1/6, 3-8:1/2

## Ⅵ 縄文時代

掘削がⅢ層以下に及ぶ部分に関して、縄文時代の調査を行った。当該時期の遺構は学園内の各所で認められ、偏りはみられなかった。

遺構の検出はⅢc層の上位～中位面で行ったが、遺物の大半はそれよりも上に包含されていた。

### 1. 検出遺構

本調査によって検出された遺構は、集石跡2基、土坑29基及び小穴109個である。検出面及び遺構内堆積土などにより、縄文時代のもつと判断した。

遺構の分布に関しては、集石跡を除くといずれも学園内各所で認められ、偏在するような状況はほとんど認められなかった。

#### SS 24 集石跡 (第29図、図版23・24)

67区にあり、僧寺中軸線の東199～201m、北487～489mに位置する。東側が既掘されており、また南側の一部も調査以前に掘削されてしまった。

このような状況とともに、調査区範囲の限界のため、集石跡の全体の広がりを捉えることはできなかった。しかし集石の中心が僧寺中軸線の東200～201m、北488m付近にあることから、これを中心とした半径2m程の範囲のもつと考えられる。

礫の垂直分布は20cm前後の間にあるが、中心部に向かって僅かにすりばち状に下がっており、厚味を増している。

集石の中心に土坑状の掘り込みが認められた。規模は、上面幅東西82cm、南北102cm、底面幅東西35cm、南北24cm、深さは約52cmを測る。平面形は南北に長軸をもつ長円形を呈しているが、南西部分が掘削されている。掘り込みの底部はやや西に偏っている。

この掘り込みの中に10×20cmほどの比較的大きな礫が入られていた。それらは掘り込みの中程に位置している。また破損礫が多い中で、これらは完形もしくは完形に近い状態にある。掘り込みの縁辺部には拳大の礫が集中している。

掘り込み内堆積土は、その壁面に堆積した褐色土(3～6層)、中央部分の大半を占める黒色土(1層)及び焼土・炭化物を混入した黒褐色土(2層)からなる。2層に含まれる焼土・炭化物は南半に集中する傾向を示している。また上述の掘り込み内の礫は1・2層に含まれており、小礫は他層にも認められるが、この大きめの礫は認められない。堆積土の状況及び礫の混入の具合から、二度にわたる構築が考えられる。すなわち褐色土が堆積したのち改めて掘り込みがなされ、黒色土及び黒褐色土が堆積したと考えられる。しかし掘り込みの上部でも集石が認められることから、この形成は連続的に行われたものと推測される。

出土遺物は土器片2点(31-19・20)、石皿2点(32-6・7)及び凹石1点(33-2)があるが、32-6の石皿と凹石は掘り込み内出土である。また土器片は集石に混じった状態で出土しており、ともに五領ヶ台式のものである。従って本集石跡も五領ヶ台式期に比定し得る可能性は高いと言える。

SS 25 集石跡 (第29図、図版23)

9区にあり、僧寺中軸線の東42~44m、北571~576mに位置する。

集石跡の規模は南北最大5.96mを測るが東西の広がりには調査区外に延びているため不明である。しかし西側への分布は極めて乏しくなっており、恐らく東側に広がりを中心があるものと考えられる。

礫の垂直分布は20cm前後の間にあるが、北側の方がやや散漫になっている。

本集石跡の下約50cmにおいてSK 747土坑を抽出した。しかし礫を包含した黒褐色土の下にはⅢa、Ⅲb層が堆積しており、SK 747土坑はⅢb層から掘り込まれていたことから、SK 747土坑はSS 24集石跡でみられたような集石下土坑にはなり得ない。従ってこのSS 25集石跡は平面的な広がりを示すのみである。またSS 24集石跡と比べると、広がりがあると同時に拡散的であると言える。

土器或は石器類の出土は認められなかった。

SK 751 土坑 (第30図、図版25)

29区にあり、僧寺中軸線の東45m、北642mに位置する。

上面幅東西117cm、南北96cm前後、底径30~38cmを測るやや不整の楕円形を呈している。深さは約34cmである。断面は半球状を呈しており、壁部と底部との境は非常に判別が難しい。

堆積土はローム土を混入した壁端の褐色土と、それ以外の暗褐色土に大別される。暗褐色土は包含する粒子により細分されるが、各層とも類似した性質を示している。下層ほど包含粒子粒量及び明度を増している。

出土遺物はない。

SK 752 土坑 (第30図、図版25)

36区にあり、僧寺中軸線の東45m、北651mに位置する。

2段に掘り込まれており、上面幅東西87cm、南北70cm、底面幅東西23cm、南北16cmを測る。平面形は楕円形を呈しており、底面は西偏する。深さは中段面まで26cm前後、底面まで38cmである。

堆積土は暗褐色土(1~3層)と暗黄褐色土(4層)に大別されるが、全体的にローム土の混入が認められる。

出土遺物はなかった。

SK 756 土坑 (第 30 図、図版 26)

43 区にあり、僧寺中軸線の東 70 m、北 240 m に位置する。南東部分が調査区外に延びておりその部分は未調査に終わった。

従って正確な規模・形状は捉えられないが、上面幅東西 132 cm、底面幅東西 97 cm 前後の不整形円形を呈している。南西部分がやや突出している。深さは約 28 cm である。底面は平坦であるが南西及び北東部にそれぞれ小穴を有している。

堆積土は底部近くの暗褐色土とローム土とを混入した暗黄褐色土 (6 層) と暗褐色土 (1・2・3 層)、褐色土 (4・5 層) に大別される。

出土遺物はなかった。

SK 747 土坑 (第 30 図、図版 26)

9 区にあり、僧寺中軸線の東 42 m、北 573 ~ 574 m に位置する。先述したように SS 25 集石跡の下にある。東西両側は調査区外に延びているため未調査に終わった。

上面幅南北最大 225 cm、深さ 40 cm 前後を測る。平面形はかなりの不整形形を呈しており、また掘り込みも凹凸が激しく底面の平坦部分は小さい。

堆積土は上部の明褐色土 (1・2 層) とそれに続く暗褐色土 (3・4 層) 及び堆積土の大半を占める褐色土 (5 ~ 11 層) に大別することができる。

出土遺物はなかった。

SK 781 土坑 (第 30 図、図版 26)

21 区にあり、僧寺中軸線の東 64 m、北 634 m に位置する。

規模は上面幅東西 132 cm、南北 100 cm 前後、底面幅東西 108 cm、南北 68 cm で、楕円形を呈している。深さは最大 34 cm ほどで底部に小穴を有する。

堆積土は、その大半を占める暗褐色土 (1・2 層) と底部近くの黄褐色土 (3・4 層) に大別される。暗褐色土にはローム粒が多く含まれている。

出土遺物はない。

SK 783 土坑 (第 30 図、図版 27)

54 区にあり、僧寺中軸線の東 196 m、北 721 m に位置する。

規模は、上面径約 100 cm、底面径 70 cm、深さ最大 72 cm である。平面形はほぼ正円形を呈し、壁も垂直に近く立ち上がる。東側に若干張り出している。底面はほぼ平坦である。断面形は逆台形状を呈している。

堆積土は大半が茶褐色土であるが、ローム土の混入具合から3層に大別される。すなわち上層の茶褐色土（1～3層）、堆積土の大半を占めローム粒を多包する茶褐色土（4～9層）、ローム土の混入度が高く壁及び底面に堆積した暗黄褐色土（10～12層）である。

燻1点が2層中から出土した他、6・7層を中心にかなりの量の細かな炭化物が検出された。

SK 787 土坑（第30図、図版27）

28区にあり、僧寺中軸線の東109m、北628mに位置する。

上面径約95cmの円形を呈するが、底面は東西50cm、南北33cmの楕円形になっている。深さは16cm前後と浅い。

堆積土は暗褐色土であるが、ローム土の混入が多い下層（4～5層）と、少ない上層（1～3層）とに大別することができる。

出土遺物はない。

SK 788 土坑（第30図、図版28）

44区にあり、僧寺中軸線の東101m、北722mに位置する。SK 783土坑とSK 790土坑が近接している。

北東一南西に長い楕円形を呈しており、長径1.2m、短径0.9mを測る。2段に掘り込まれており、深さは中段面まで19cm前後、底面まで約33cmである。底部は東偏しており、東側の立ち上がりは直線的である。

堆積土は上層の暗褐色土（1・2層）と、下層のローム土を多く混入した暗黄褐色土（3・4層）に大別される。

出土遺物はない。

SK 793 土坑（第30図、図版28）

33区にあり、僧寺中軸線の西20m、北645mに位置する。南西部分が調査区外に延びており、また東側から南側にかけて攪乱されているため、原形を窺い知ることは難しい。しかし断面を見ると南側の立ち上がりはほぼ旧形を保っており、それによると南北の上面幅は98cm、或はそれを僅かに上回る規模であったといえる。深さは46cmほどで断面は半球状を呈している。

堆積土は包含する粒子の状態により細分されるが、各層とも類似した暗褐色土である。

出土遺物はない。

SK 794 土坑（第30図、図版29）

34区にあり、僧寺中軸線の21m、北650mに位置する。上述のSK 793土坑の北にある。

南及び西側が調査区外に延びており、全形を捉えることはできないが、径2mほどの不整形

を呈するものと推測される。深さは約 75 cm である。

堆積土はローム粒を多包する暗褐色土（1～4層）、ローム土を多く混入する黄褐色土（5層）及びローム土の混入がやや少なくなる下層の暗褐色土（6層）に大別することができる。

出土遺物はない。

#### SK 804 土坑（第 30 図、図版 29）

49 区にあり、僧寺中軸線の東 39 m、北 821 m に位置する。

北東—南西に長い楕円形を呈しており、上面長径 114 cm、短径 81 cm、底面長径 69 cm、短径 36 cm を測る。深さは 18 cm ほどと浅い。断面は舟底形を呈している。

3 分の 1 ほどが攪乱を受けているが堆積土の状況は捉え得る。すなわち上層の褐色土（1～3 層）と、下層のローム土を混入した黄褐色土（4 層）とに大別される。

#### SK 805 土坑（第 30 図、図版 30）

47 区にあり、僧寺中軸線の東 61 m、北 826 m に位置する。上述の SK 804 土坑の東にある。

北側が調査区外に延びており、全形を捉えることはできない。北東—南西に長い楕円形を呈するものと推測される。規模としては今回検出された当該時代の土坑の中では最も大きなものになると考えられる。壁の立ち上がりは直線的であり、断面形はすりばち状を呈している。

堆積土は上層のローム粒或はローム土を混入した褐色土（1～5層）と下層の黒褐色土（6～8層）に大別される。なお 4 層の上部には焼土粒が認められた。

縄文土器片 8 点、礫 11 点が上層より出土した。

以上の土坑の他に図示しなかったものが 17 基ある。その大半のものは、調査区外に延びているため部分的な調査に終り、全形を推測することさえ困難なものであった。以下に略説する。

SK 748 土坑と SK 749 土坑とは 6 区に位置する。前者は長径 90 cm、短径 69 cm の南北に長い楕円形を呈する。深さは 20 cm ほどであり、堆積土はその大半を占める茶褐色土と、底部にある茶褐色土に分かれる。後者は径約 65 cm の円形を呈し、深さは 20 cm ほどである。堆積土は SK 748 土坑とほぼ同じである。ともに出土遺物はない。

SK 750 土坑は 18 区に位置する。西側が調査区外に延びており全形は不明であるが、東西に長い楕円形を呈するものと推測される。深さは 30 cm ほどである。堆積土は上層の暗褐色土と、下層のローム土を混入した暗黄褐色土に分かれる。出土遺物はない。

SK 791 土坑と SK 792 土坑とは 31 区に位置する。前者は後者によって切られており、また北

側が調査区外に延びているため、両者ともに規模・形状については捉えられない。深さは前者が 32 cm、後者が 28 cm とほぼ等しい。堆積土も前後者類似しており、底面に薄くローム土を含んだ暗黄褐色土があり、その上に堆積土の大半を占める暗褐色土からなる。ともに出土遺物はない。

SK 753 土坑は 40 区に位置する。 $\frac{1}{3}$  が擾乱を受けており、東側は捉えられない。深さは 18 cm ほどで、堆積土は約 3 cm の厚さのある底面直上のローム土を含んだ暗黄褐色土と、その上層の褐色土である。出土遺物はなかった。

SK 789 土坑と SK 790 土坑は 45 区にあり、先述の SK 788 土坑に近接している。ともに大半が北側の調査区外に延びており、規模・形状は不明である。現況での深さは前者が 20 cm、後者が 52 cm を測る。SK 789 土坑の堆積土は、底面に薄くあるローム土を多量に含んだ褐色土と、堆積土の大半を占めるロームブロックを少量含んだ暗褐色土、そして最上層の暗褐色土に分けることができる。また SK 790 土坑の堆積土も SK 789 土坑例に類似しており、3 層に大別することができた。SK 789 土坑には出土遺物はないが、SK 790 土坑からは礫が 1 点出土した。

SK 782 土坑は 53 区に位置する。南半が調査区外に延びているため全形は不明であるが、径が 1.2 m ほどの不整形を呈するものと推測される。深さは最大 25 cm を測る。土坑の中央付近が小穴に切り込まれているが、その底部は土坑の底部にまで僅かな差をもって達していない。堆積土は暗黄褐色土であるが、底部より 4～5 cm はロームブロックをより多く含んでいる。出土遺物はない。

SK 784・785・786 土坑は 56 区にあり、東西に並んでいる。SK 784・785 土坑は南半が、SK 786 土坑は南及び東側がそれぞれ調査区外に延びているため全形は不明であるが、SK 784 土坑は径 110 cm、SK 785 土坑は径 130 cm、そして SK 786 土坑は径 130 cm ほどのやや長円形を呈するものと推測される。深さは各々 12 cm、21 cm、6 cm を測り、SK 786 土坑の断面は浅い皿状を呈している。SK 784 土坑と SK 786 土坑の底面はほぼ平坦であるのに対して、SK 785 土坑は若干の凹凸がある。SK 784 土坑の堆積土は上層のロームブロックを僅かに含んだ暗褐色土と、ローム土をやや多く含んだ褐色土乃至は黄褐色土に大別される。SK 785 土坑の場合は暗褐色土を基調とし、底部にローム土の混入がやや認められる。また SK 786 土坑はローム粒などの包含粒子の状態により細分されるがほぼ均一の暗褐色土である。いずれにも出土遺物は認められなかった。

SK 801・802・803 土坑は 57 区にある。いずれもその大半が調査区外にあり、また前二者は 2 基の小穴により切られているため、全形を推測することも困難である。深さは現況で最大 16



cm、12 cm、14 cmほどの比較的浅いものである。SK 803土坑のみ底面に若干の凹凸が見られる。SK 801土坑の堆積土は粒子をほとんど含まない褐色土であるが底面近くになるにつれ黄色味を増している。SK 802土坑の場合は締まりのやや弱い上層の暗褐色土と、ロームブロックを含む下層の暗褐色土に大別できる。またSK 803土坑は底部に行くにつれてローム粒及びローム土を僅かに増すが、ほぼ暗褐色土の均一層と言える。いずれにも出土遺物は認められなかった。

SK 800土坑は60区にある。調査区の東及び南壁に阻まれ、全体の $\frac{1}{4}$ 程度のみ調査に終わった。現況から単純復元すると、径190 cmほどの比較的大きな土坑となる。しかし掘り込みは浅く、10 cm前後の深さしかない。底面はほぼ平坦である。堆積土は上層の暗褐色土と下層のローム土を多く含んだ褐色土に大別できる。出土遺物は破礫2点のみである。

#### 小穴

34の調査区により総計118個の小穴が検出された。規模或は堆積土において多少のバラエティーはあるが、ほぼ上面径20～60 cm、深さ10～40 cmの規模を有し、堆積土は褐色土乃至黄褐色土を基調として、ローム土を混入しがちであるという様相に集約できよう。底面はほとんどがⅣ層内にあり、Ⅴ層に達するものは極めて少なかった。

小穴は学国内全体に分布するものと考えられ、特別に偏在する傾向は認められなかった。そしてまた、1つの調査区において多出する場合、それは調査区面積との比例的傾向にあった。ただし46区にあっては割合に狭小な調査区から11個の小穴が検出されておりやや注目に値する。

出土遺物を有するものは少なく3個を数えるにすぎない。また遺物もその大半が小さな破礫である。

これらの小穴の機能については不明な点も多いが、少なくとも今回調査された範囲の内では、構造物の一因をなすものは認められなかった。

## 2. 出土遺物

本調査により、土器、石器、剥片、礫などが発見されたが、その量は集石跡の礫を除くと僅かなものである。またその大半が包含層中のものであった。遺物はⅢa層～Ⅲc層の間に含まれていたが、上層部分での検出率が高い傾向にある。また集石跡を除くと遺物が特別集中して出土する状況は認められなかった。また調査区全体を通覧しても、遺物の出土が偏在するような傾向はなかった。

出土遺物は総計3,000点に及びが上述したように集石跡の礫がその8割を占めている。土器は80点、石器は9点を数えるにすぎない。

#### 土器 (第31図、図版38)

出土した土器はいずれもが小破片であり、全形を捉え得るものは皆無である。時間的にも早期

から後期までのものがあり、量的に突出する時期は認められない。調査区を越えた接合資料はなかった。図示したものの以外の大半の土器は無文或はかなりの小破片であり、時期不明瞭のものである。時期を認定し得たものを9群に分類した。

1群土器(1~6) 燃糸文系土器及び当該時期の縄文系土器を一括する。1はL-Rの縄文を斜位に施したもので、口唇部付近は横位のナデがなされている。2~4もL-Rの縄文が施されたもので、条間4~5cm、1cmあたり4~5粒である。5はRの燃糸文が施されたものである。条は右下がりに斜走するが、その角度は一定していない。条間隔は広く、部分的には燃糸文を消すようにそれと直交する角度で強いナデがなされている。節も太目である。6は条間隔が広く、節の太い燃糸文を直交するように施したものである。胎土などから3と同一個体であると考えられる。本群の土器はいずれも器厚が薄い。

2群土器(7~13) 押型文土器を一括する。図示した以外に小破片3点があり、それらを含めた10片は全て同一個体であると考えられる。楕円文を施したもので、胴部に縦方向に施したのも口縁部に横方向に施した異方向密接の文様構成をとっている。1の口縁部の中心よりやや右寄りには、施文後粘土を充填し、更に施文した痕が認められる。施文原体は径2.4cm、長さ2.2cmほどで、両端は斜に切り落としている。1周2単位4段の印刻が行われている。陽部(原形除削部)に対し陰部は僅かに狭い。文様は明瞭である。内面は強いナデにより調整されており、砂粒を多く含む割には堅緻である。器厚は8mm前後である。なお上述の6・5の燃糸文土器とこの押型文土器とは包含層中ではあるが46区東側の径30cmほどの範囲の、ほぼ同一レベルから出土したものであることを付記しておく。

3群土器(14~15) 田戸下層式土器を一括する。14は直交する斜位の沈線文と、その内に施された円形押圧文により文様構成がなされている。器表面は平滑に仕上げられているが、全体的な施成は悪い。胎土に砂粒を含み脆い。15はやや右下がりの斜走する沈線文を下端の横走する沈線文の上に施したものである。縦走する沈線文の間隔は5~6mmほどである。砂粒・雲母を少量含む。施成はやや弱い。

4群土器(16~17) 条痕文土器を一括する。16・17ともに表裏条痕文の土器である。16は表面が横走の、裏面が不定方向の条痕文が施されている。砂粒を含み、施成はやや不良。17は表面が縦走し、裏面が横走する条痕文が施されているが、裏面には施文ののち横位のナデが施されている。施成はやや不良である。

5群土器(18) 前期の木鳥式土器を一括する。胴部に篋状工具で施文する。文様は波状文や楕円文というような篋状工具を屈曲回転させることで形成している。施文以前に斜位のナデを施している。工具幅は約1.4cmであると考えられる。口唇部には刻目が施されている。器形は僅かに反外するものの、ほぼ直線的である。器厚は薄い。胎土に砂粒・小石をやや含むが堅緻である。

6群土器(19~21) 中期初めの五頸ケ台式土器を一括する。19は口唇部に沈線文と刻

目文を、口縁部には上から短かくて浅い連続した刻目文、4条の沈線文、そして交互する刺突文を施したものである。内面は強いナデにより研磨されている。砂粒を僅かに含む。焼成はよい。20は瓜形文を隆帯に沿って施文するものである。また口縁部端には角押文が施されている。19とともに口縁部内面は稜をなして張り出している。砂粒・小石を含む。焼成はよい。21は懸垂する貼付けられた隆帯の両側に浅い沈線文が施文されたものである。砂粒・雲母などを多く含む、焼成はやや不良である。この土器は本群の中でも新しい段階に属するものと考えられる。

7群土器(22~26) 中期前半の阿玉台式土器と勝坂式土器を一括する。22は隆帯の内外に沿って角押文を施すものである。隆帯内の角押文は右下部分で施文方向を転換している。角押文の内側は軽く横ナデされている。僅かに内彎しながら立ち上がっており、口縁部の内面は稜をなして張り出している。砂粒を含む。焼成はよい。23は22と同様、隆帯の内外に沿って角押文を施文したものである。砂粒・小石英・金雲母を含む。焼成はよい。24は隆帯に沿って角押文を施文する。隆帯が斜走から縦走に変わることによって施文方向も変化し、また角押文の幅がやや広くなり、単位施文数は増加する。角押文の内側に横ナデを施す。砂粒・小石を含む。焼成はよい。25は瘤状突起を有する隆帯の左右に結節沈線文を施文したもので、右が2条なのに対して左は1条である。隆帯は貼付けたのち両側をナデしているが、突起部分はより強くナデを施している。砂粒・小石英・金雲母を含む。焼成はよい。26は条線文を切って沈線文を施文したものである。砂粒をやや含む。焼成はよい。

8群土器(26~30) 中期後半の加曾利E式土器を一括する。27は胴部にR-Lの縄文を施文したものである。条間約3mm、1cmあたり約5粒を数える。縄文を切る縦走する沈線が左端に認められる。内面は強いナデにより平滑に仕上げられている。砂粒をやや含む。焼成はよい。28は調整沈線によって縄文施文部分と縄文磨り消し部分が区画されている。縄文は、条間6mm、1cm当り3粒である。砂粒及び赤色スコリア状物質を含む。焼成はやや悪い。内面は2次焼成のため剥落が著しい。29は浅鉢の口縁部の破片である。胴部に横走する沈線文と現況弧状を描く沈線文とが施されている。この沈線文の間のやや右に不規則な短く浅い、左下りに斜行する沈線文が認められる。胴部から口縁部にかけて僅かに内彎しながら立ち上がる。内面はナデにより調整されている。小石・砂粒を少量含む。焼成はやや不良である。30も浅鉢の口縁部の破片である。口縁部端より2.8cmのところの低い隆帯を貼付けており、その両側には調整沈線が認められる。内面はナデにより調整されている。小石・砂粒を少量含む。焼成はよい。

9群土器(31) 後期の掘之内式土器を一括する。31の1点が認められたにすぎない。口縁部に横走する沈線文を施文し、その下に左下り斜走する浅い沈線文がやや間をあけて施される。口縁部の内面はやや肥厚する。器厚は薄い。砂粒を僅かに含む。焼成はよい。

#### 石 器 (第 32・33 図、図版 39・40)

石器は9点が発見された。スクレイパー2点、スタンプ状石器2点、石皿3点、凹石1点であ

る。石皿及び凹石には完形品はない。

スクレイパー（33-1・2）1は黒曜石を素材としている。背部の中央が欠損している以外はほぼ完形である。2は砂岩製である。自然面を残し、その一部を刃部としている。

スタンプ状石器（32-3・4）3は底部に剝離痕を僅かに残しているが、非常に磨耗している。底部以外はいずれも自然面を残している。砂岩製で575gある。4は表裏面とも非常に磨滅しており、側縁部を除くと加土痕は観察し難い。側縁部は僅かに自然面を残すが、数回にわたる剝離が丁寧になされて調整されている。底部は平坦であるが、3ほど磨耗はしていない。砂岩製である。

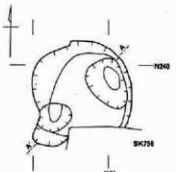
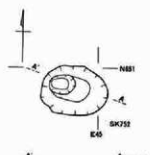
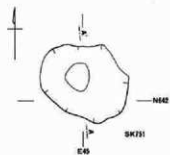
石皿（32-5～7、33-1）5は大半を欠損するものである。凹面はさほど明瞭ではないが、よく磨れている。焼成を受けている。砂岩製で、575gある。6は約 $\frac{1}{2}$ 残存している。凹面は顕著である。焼成を受けている。砂岩製で1940gある。7は約半分と縁部の一部を欠損している。凹面は明瞭で変色している。これも焼成を受け脆くなっている。砂岩製で964gある。33-1は $\frac{1}{3}$ 残存したものである。凹面はさほど明瞭ではないがよく磨れている。変成岩製で2550gある。

凹石（33-2）図示した1点が発見されたのみである。3ヶ所に凹部分が認められる。焼成を受けたため、細かな亀裂が各所に入っている。砂岩製で2350gある。

第29図 SS24・25集石跡、縄文時代土坑



1. 黒色土 (ローム粒多量)
2. 黒褐色土 (粘土・炭化物含む)
3. 暗褐色土 (ローム粒中量含む)
4. 明褐色土 (ロームアロップ含む)
5. 明褐色土 (4層に類似、ローム粒多い)
6. 明褐色土 (ローム粒多量に含む)



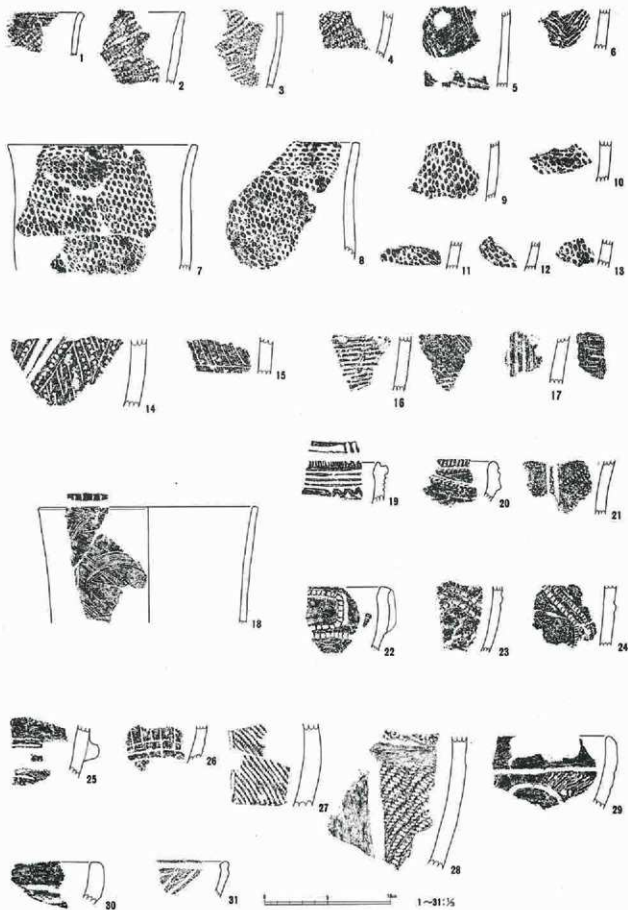
1. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
2. 暗褐色土 (ローム粒多量に含む)
3. 暗褐色土 (2層に類似、粘土多量)
4. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
5. 褐色土 (ローム粒含む)
6. 褐色土 (ローム土少量含む)

1. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
2. 暗褐色土 (ローム土含む)
3. 暗褐色土 (内れたローム土含む)
4. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)

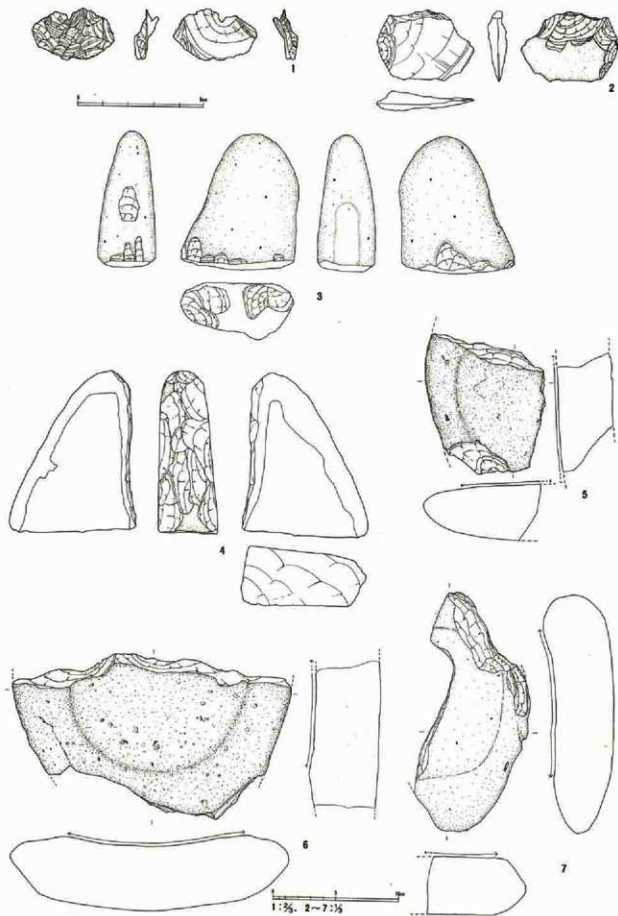
1. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
2. 暗褐色土 (1層に類似、中量含む)
3. 暗褐色土 (ロームアロップ少量含む)
4. 褐色土 (ローム粒多量に含む)
5. 暗褐色土 (ローム土少量含む)
6. 暗褐色土 (ロームアロップ含む)



第31図 縄文土器

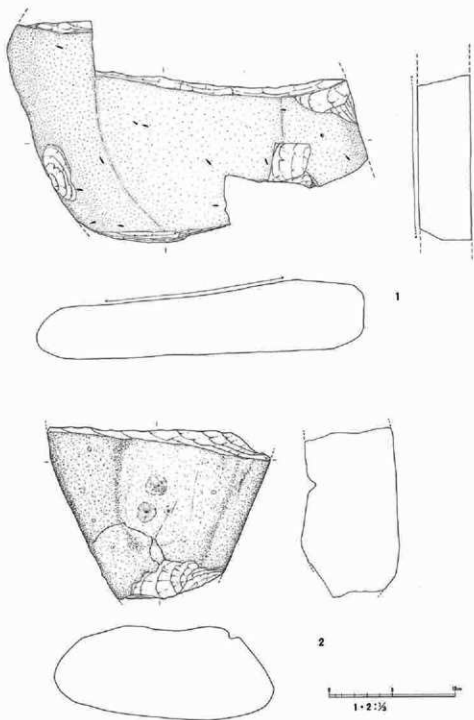


第32回 縄文石器





第33図 縄文石器



## 小 結

### 1. 武蔵国分寺遺跡北縁部の遺構について

調査地区の概観でも述べたように、国鉄鉄道学園内においては今回の調査を含め都合4度の調査が行われた。以下にその内容を列記すると、

第72次調査（幹線実習館建設に伴う調査）昭和53年7月3日～同年10月27日（既報告）<sup>(1)</sup>

竪穴住居跡7、掘立建物跡1、溝跡2、土坑19、炉跡2、小穴1

第108次調査（実習館建設に伴う調査）昭和55年3月10日～同年5月14日

溝跡1、土坑2

第147次調査（研修棟建設に伴う調査）昭和57年8月6日～同年9月3日

小穴28

第168・190次調査（下水道工事に伴う調査）昭和58年3月1日～昭和59年6月15日（今回）

竪穴住居跡3、掘立柱建物跡2、溝跡8、土坑7、小穴77、不明遺構1

であった。

こうした鉄道学園内の検出遺構は、その地理的位置から、武蔵国分寺遺跡の北限に位置する重要なものであると言える。

つまり住居跡は、S I 304住居跡（第168次調査）の僧寺中軸線北456mを南端、S I 175住居跡（第72次調査）の僧寺中軸線北480mを北端とする14mほどの間にある10軒が、本遺跡の集落の北端を占める一帯を形成している。

掘立柱遺構はS B 75掘立柱遺跡（第190次調査）が現況では最北端に位置する。ところがS B 51掘立柱建物跡（第72次調査）が住居跡群中にあるのに対し、S B 75・76掘立柱建物跡（第190次調査）は住居跡群から100m近くも離れて独り位置している。このことは、集落の北端が上述したよりも更に北方にある可能性を示している。しかし第108次調査では、部分的ではあるが約60mに亘り、第72次調査の北側を発掘しており、その結果、第72次調査検出の住居跡に北接する住居跡のないことが確認されている。また第190次調査においても学園東側にある3軒の住居跡の北方には住居跡の存在は認められなかった。こうしたことからS B 75・76掘立柱建物跡の有様には疑問は残るものの、現在のところ上述したように住居跡群が集落の北端と考えるのが適当であろう。

溝跡は、現在確認されている最北に位置するものは、S D 181溝跡（第190次調査）である。しかしそれは南北方向溝であり、その北端部分が何処に位置するかは不明である。遺跡-集落の北限を設定するような東西方向溝の最北端にあるものはS D 170溝跡（第168次調査）である。この溝跡は僧寺中軸線の北607mに位置するが、これより北方に上述のS D 180溝跡の他S D 174溝跡（第168次調査）、S D 175溝跡（第168次調査）、S D 182溝跡（第190次調査）が確認

されている。従って S D 181 溝跡などの南北方向溝が不定期的に北に延び、その判然としない状況が遺跡の北限の様相と言えよう。

つまり僧寺中軸線の北 450～480 m に集落の北限があり、更にその北 300 m ほどの範囲で総体的な遺跡の北限があるものと理解ができる。

ところでこうした北端の住居跡の時期は、第 72 次調査の 7 軒についてはほぼ同時期<sup>(2)</sup>、つまり武蔵国府・国分寺跡出土土器変遷図で言う第Ⅳ期第 2 段階に位置付けられている。さて今回調査した 3 軒の住居跡 (S I 304・305・321) であるが、遺物量の貧弱さに加え、出土遺物の大半が小破片のものであることから、年代観の寄りどころは見出し難い。しかしその中にありやや形態を捉え得る土師器の壺形土器 (以下壺と略す、他器種についても同様) に主眼を置き考えてみることにする。

まず S I 304 住居跡出土の壺であるが、頸部が「く」字状に外反し、また胴部の張りはほとんどないものである。調整技法は、外面においては口縁部から頸部下位にかけて指頭押圧によるナデを施し、それ以下には横位の削りを行っている。内面は口縁部より横位のナデである。これは第 72 次調査の早川が言う壺 3 タイプに属するものと考えられる。しかし「胴部上端に横へら削り」を施す典型品と比べるとやや簡略化の傾向が認められ、また体部外面に指頭痕を残すのは、先の土器変遷図で言う第Ⅴ期の特徴である。しかし口縁部などは器厚化しておらず第Ⅴ期までは下らないと考える。従って本品は第Ⅳ期のものの中でも比較的新しいものであると言える。

S I 305 住居跡からは壺は出土していない。しかし少量ながらも出土した土器 (土師質土器) の特徴は S I 304 住居跡出土のものに類似しており、更に両住居跡が近接ししかもその方位をほぼ等しくしていることなどからはほぼ同時期に位置付けることができよう。

S I 321 住居跡出土の壺は口縁部がやや弱く外反しており、その形状は「く」字状に近いが、頸部から口縁部にかけてへらナデを施すことで「コ」字状の形状を留めようとしている。胴部の張りは強い。調整技法は、外面においては頸部まで横位の削りを施したのち胴部に下方向の削りを行っている。これは早川が言う壺 2 タイプにあてはまる。本品はよくそのタイプの形状・調整技法を示しているが、それに特徴的な「口唇部に一条の沈線」がないことから僅かに新しいものと言える。また S I 304 住居跡或は S I 305 住居跡と比較した場合、壺や残片ながら環などは S I 321 住居跡出土品の方が割合に古い様相を留めている。またカマドなどの住居構造をみても S I 321 住居跡の方が比較的しっかりとしている。ゆえに三者はほとんど同時期に置くとしても、その微細な時間幅の中では S I 321 住居跡が先行すると考える。

更にこの時間差は第 72 次調査検出の 7 軒の住居跡と今回検出した上述の 3 軒の住居跡についても言えよう。従って今回検出された 3 軒の住居跡は、7 軒の住居跡 (第Ⅳ期第 2 段階) よりも僅かに後出するとして、第Ⅳ期第 3 段階、或は下ったとしても第 4 段階初頭に位置付けることが可能であろう。その年代は 10 世紀から 11 世紀にかけての時期であると考えられる。

そしてまた、以上のことから、武蔵国分寺遺跡の北限を形成する一群の住居跡は、遺跡形成の

後半期にあるとは言え、その最終段階にまでは下らないわけである。つまり現在までの発掘成果に立脚して言うならば、地域としての集落形成の流れの途中で武蔵国分寺の北方に占地する住居の形成は終わったのであろう。

## 2. 縄文時代の集石跡について

今回の調査により2基の集石跡が検出された。鉄道学園内では初めての集石跡の検出であった。

ところでこうした集石跡の分析、特に集石を構成する礫の個体的属性の統計的分析が近年とみに活発になっている。これは集石跡の遺跡への考古学的な位置付けを目指したものである。しかし今回の調査は、その調査原因の性格上、1つの遺構に対する鳥瞰視の見方が難しく、遺跡への位置付けもなし難いと思われる。そこで少なくとも礫の個体的属性を提示し、将来への蓄積としたい。(総数 SS 24 = 1356、SS 25 = 1170)

分析項目は7点ある。①破損度、②焼成、③スス或はタール状物質の付着、④焼け面とスス或はタール状物質の付着位置の合致度、⑤形態、⑥大きさ、⑦石材である。

これらの項目には数点の指標が設定される。

### ① 破損度

- a、完形
- b、一回性の軽破損で、核であるもの
- c、一回性の軽破損で、剥片であるもの
- d、複回性の軽破損で、核であるもの
- e、複回性の軽破損で、剥片であるもの
- f、原石面を留めないほどの重破損で核であるもの
- g、原石面を留めないほどの重破損で剥片であるもの

### ② 焼成

- a、焼成を受けていないもの
- b、表面のみが焼成を受けているもの
- c、内側まで焼成を受けているものの表面と比べると弱いもの
- d、内側まで焼成を受け表面と同程度のもの

### ③ スス或はタール状物質の付着

- a、付着が認められないもの
- b、表面のみに付着が認められるもの
- c、内側にも付着が認められるが少量のもの
- d、内側にも付着が認められ表面と同程度のもの

### ④ 焼け面とスス或はタール状物質の付着位置の合致度

- a、ほぼ合致

b、僅かに合致

c、合致せず

⑤ 形態

a、円形で扁平なもの

b、円形で扁平でないもの

c、長円形で扁平なもの

d、長円形で扁平でないもの

⑥ 大きさ

a、長径

b、短径

c、重量

⑦ 石材

a、砂岩系

b、チャート系

c、その他

以上の項目一指標に従って分析を行った結果は次に記する通りである。

① 破損度

(S S 24) ㉑ 1.9% ㉒ 2.3% ㉓ 2.9% ㉔ 2.7% ㉕ 11.2% ㉖ 3.4% ㉗ 75.6%

(S S 25) ㉑ 5.7% ㉒ 3.4% ㉓ 3.8% ㉔ 2.3% ㉕ 9.0% ㉖ 0.9% ㉗ 74.9%

② 焼成

(S S 24) ㉑ 2.8% ㉒ 4.1% ㉓ 0.2% ㉔ 92.9%

(S S 25) ㉑ 2.3% ㉒ 4.4% ㉓ 1.6% ㉔ 91.7%

③ スス或はタール状物質の付着

(S S 24) ㉑ 83.0% ㉒ 3.3% ㉓ 8.0% ㉔ 5.7%

(S S 25) ㉑ 80.9% ㉒ 11.1% ㉓ 5.6% ㉔ 2.4%

④ 焼け面とスス或はタール状物質の付着位置の合致度

(S S 24) ㉑ 33.9% ㉒ 54.5% ㉓ 11.5%

(S S 25) ㉑ 26.1% ㉒ 69.7% ㉓ 4.2%

⑤ 形態

(S S 24) ㉑ 6.1% ㉒ 15.5% ㉓ 17.2% ㉔ 61.2%

(S S 25) ㉑ 3.8% ㉒ 12.9% ㉓ 17.8% ㉔ 65.5%

⑥ 大きさ(平均値)

(S S 24) ㉑ 4.15 cm ㉒ 2.67 cm ㉓ 70.0 g

(S S 25) ㉑ 3.91 cm ㉒ 2.54 cm ㉓ 28.3 g

## ⑦ 石材

(S S 24) ㊶ 71.3% ㊷ 28.4% ㊸ 0.3%

(S S 25) ㊶ 72.9% ㊷ 27.1% ㊸ 0.0%

以上の結果をみると、両集石跡の礫の属性は近似していることが理解できる。

まず破損度については大半が原石面を留めない剥片である。S S 25 集石跡の方にやや完形例が多い。焼成も 97% 以上のものが焼成を受けている。しかも表面・内側ともに焼成されたものが 90% 以上にも及ぶことは、焼成が礫の破損過程或は破損後に行われたことを示すものである。それはまた、S S 24 集石跡では 43 例、S S 25 集石跡では 52 例の接合例があるが、その約 80% の事例において、表面及び内側に焼成とスス或はタール状物質の付着が各礫に認められたことに証明される。スス或はタール状物質の付着度は割合に低い。しかしそれが付着している面は 90% ほどの高率で合致している。形態について言えば大半が扁平な長円形である。しかし破損度が高いため形態の知り得る資料のみを対象にしていることから、或は破損度を形態とに有機的関連を求めるべきであろうか。礫の大きさは破損度と関係する面が強く、S S 24 集石跡例が僅かに上回っていることに有意差があるとは考え難い。石材は砂岩系のものが 70% 以上を占める。

こうした分析結果を提示したとしても、これらの集石跡を遺跡の中に位置付けることはおろか、集石自身が内包する機能という問題を解決することも困難である。各様の解釈もできようが、上記の結果からそれを導き出すことはやや無理である。少なくともこの地区の縄文時代の遺構の状況がもう少し明らかになるまで結論的なことは差し控えたいと考える。

## 註

- (1) 滝口 宏他『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅳ』 1980
- (2) 西脇俊郎・山口民一「武蔵国府・国分寺出土土器の変遷（試案）」『文化財の保護』12 1980
- (3) 早川 兼「出土土器について」『武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅳ』 1980
- (4) (3)に同じ
- (5) (3)に同じ



# 圖 版





図版1 SI 304住居跡



1. 全 景 (北から)



2. 全 景 (東から)



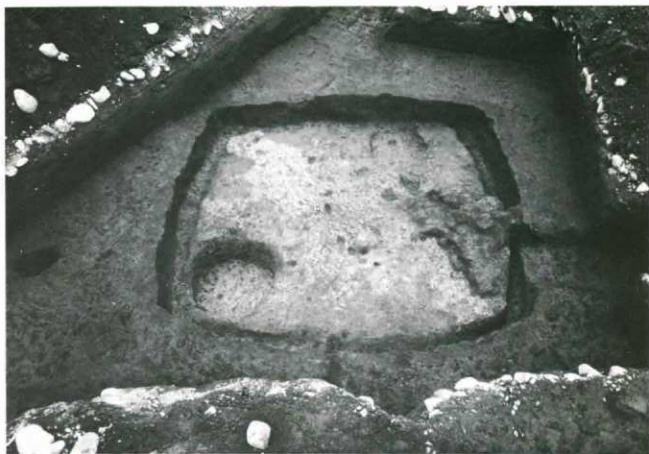
1. カマド断面 (南から)



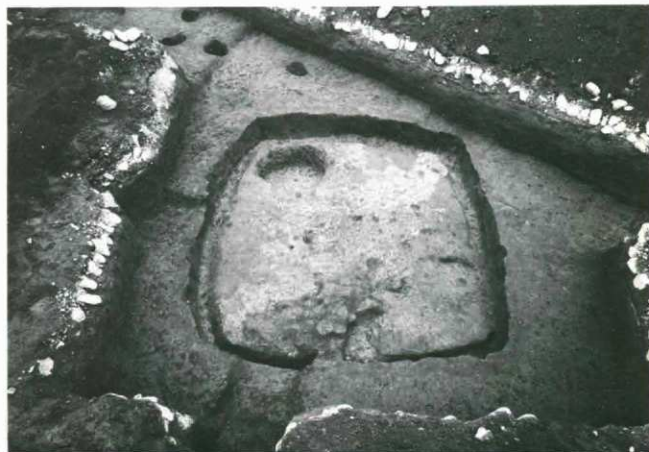
2. カマド全景 (南から)



3. 住居跡内小穴断面 (北から)



1. 全 景 (西から)



2. 全 景 (南から)

図版4 SI 305住居跡



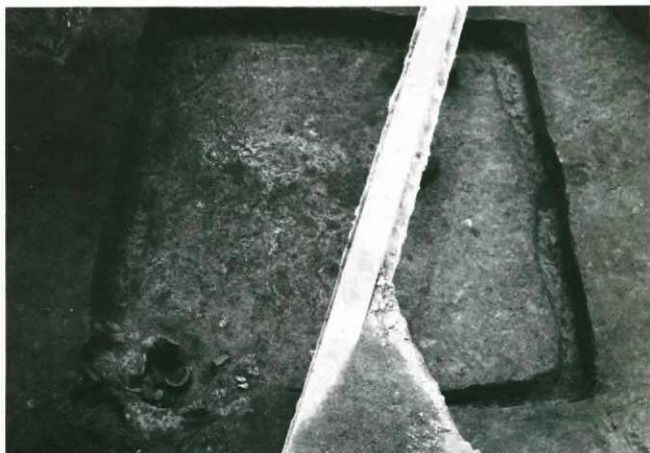
1. 東西土層断面 (南から)



2. マウンド状遺構 (西から)



3. マウンド状遺構断面 (西から)



1. 全 景 (東から)



2. 全 景 (東から)



1. 遺物出土状態（東から）



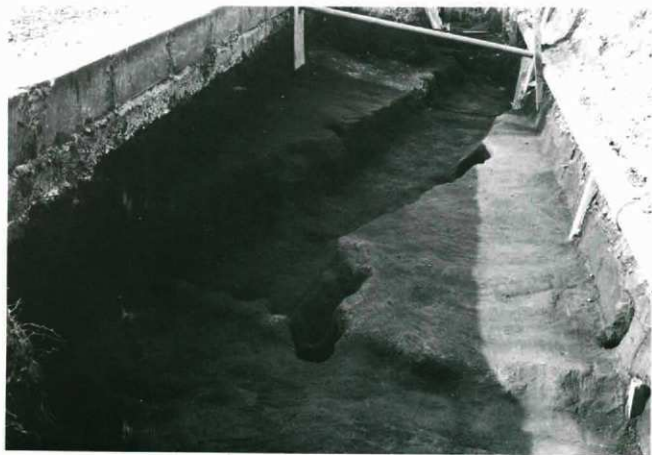
2. カマド遺物出土状態（西から）



3. カマド全景（西から）



1. SD168・169清跡（6区）全景（西から）



2. SD168・169清跡（6区）全景（南から）



図版 8 SD168・169溝跡



1. SD169溝跡（6区）東西土層断面（南から）



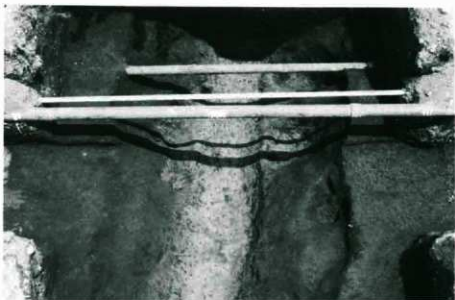
2. SD168溝跡（6区）南北土層断面（東から）



3. SD168溝跡（7区）全景（北西から）



1. SD176溝跡全景（西から）



2. SD170溝跡全景（西から）



3. SD170溝跡南北土層断面（東から）



1. SD174溝跡 (22区) 全景 (東から)



2. SD174溝跡 (22区) 東西土層断面 (南から)



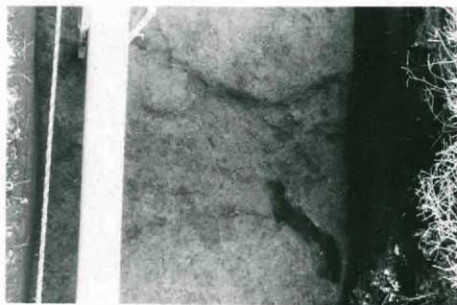
3. SD174溝跡 (37区) 東西土層断面 (南から)



1. SD175溝跡全景（北から）



2. SD182溝跡（26区）全景（北から）



3. SD182溝跡（39区）全景（東から）



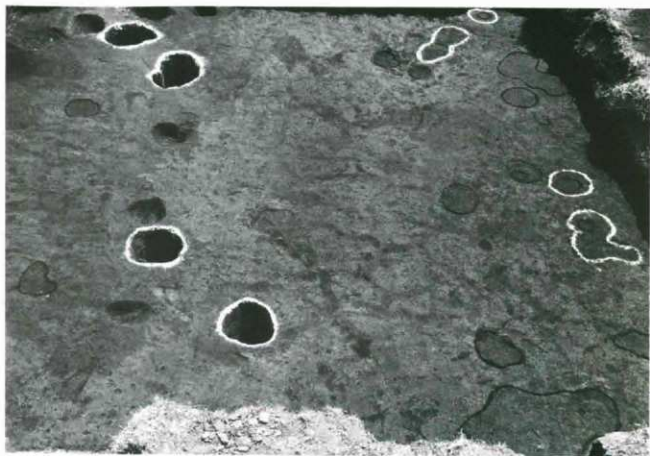
1. 全景（北から）



2. 東西土層断面（南から）



3. 東西土層断面（北から）



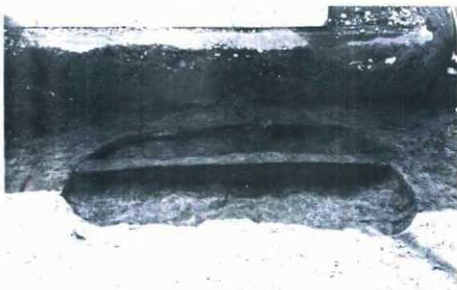
1. SB75・76獨立柱建物跡全景（西から）



2. SK738土坑全景（北東から）



1. SK739土坑全景（南から）



2. SK739土坑南北土層断面（東から）



3. SK740土坑全景（南から）



1. SK744土坑東西断面（南から）



2. SK755土坑全景（北から）



3. SK757土坑全景（西から）





1. 50区東壁土層断面（西から）



2. 51区北壁土層断面（南から）



3. 52区南壁土層断面（北から）



1. 10区全景 (南から)



2. 12区全景 (南から)



3. 14区全景 (北東から)



1. 15区全景（南西から）



2. 16区全景（北から）



3. 24区全景（北西から）



1. 25区全景（西から）



2. 41区全景（東から）



3. 57区全景（南から）



1. 58区全景 (東から)



2. 59区全景 (南西から)



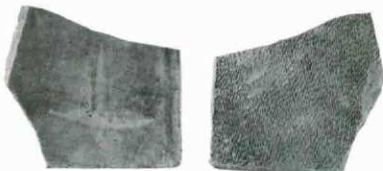
3. 61区全景 (西から)



26-4



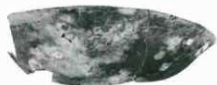
26-5



26-7



26-6



26-9



26-11



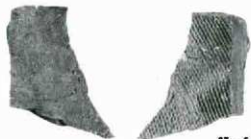
26-12



27-2



27-3



27-5



27-4



27-6



27-7



27-8



28-1



27-9



28-2



28-4

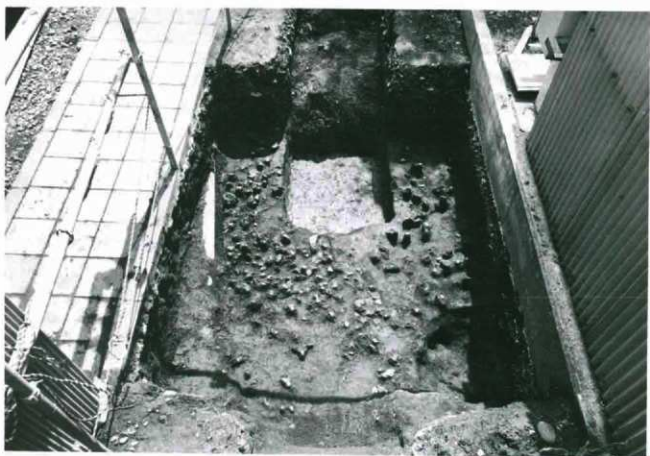


28-5



28-8

図23 SS24・25集石跡



1. SS24集石跡全景 (北から)



2. SS25集石跡全景 (北から)



図版24 SK745 (SS24集石跡下) 土坑



1. 全 景 (南から)



2. 構築時全景 (西から)



3. 南北土層断面 (西から)



1. SK751土坑全景 (西から)



2. SK751土坑南北土層断面 (西から)



3. SK752土坑全景 (西から)



1. SK756土坑全景（北西から）



2. SK747土坑全景（西から）



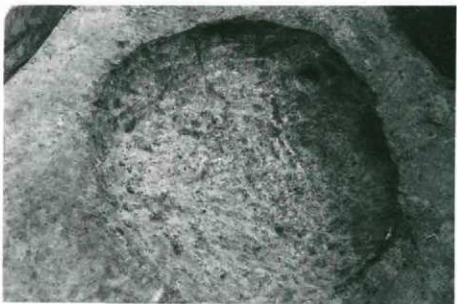
3. SK781土坑（北から）



1. SK783土坑全景(北から)



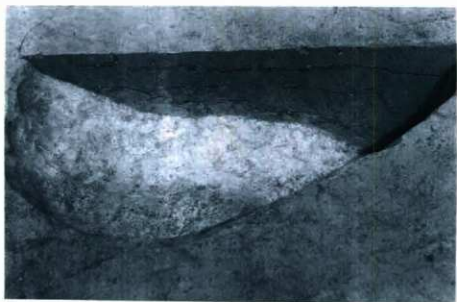
2. SK783土坑東西土層断面(南から)



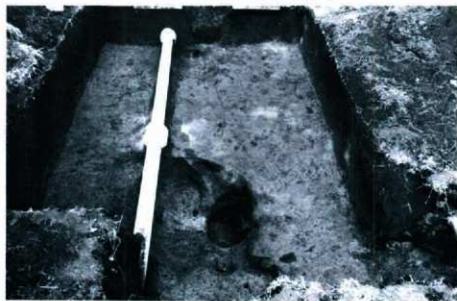
3. SK787土坑全景(西から)



1. SK788土坑全景（南から）



2. SK788土坑東西土層断面（南から）



3. SK793土坑全景（南から）



1. SK794土坑全景（西から）



2. SK794土坑南北土層断面（東から）



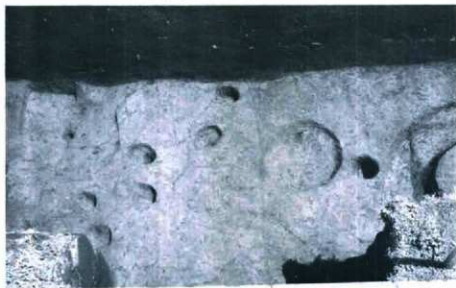
3. SK804土坑全景（南から）



1. SK805土坑全景 (南から)



2. 1区全景 (東から)



3. 2区全景 (西から)



1. 18区全景 (北東から)



2. 19区全景 (南から)



3. 20区全景 (北から)





1. 23区全景 (東から)



2. 27区全景 (南から)



3. 28区全景 (北から)



1. 29区全景 (西から)



2. 31区全景 (西から)



3. 32区全景 (北から)



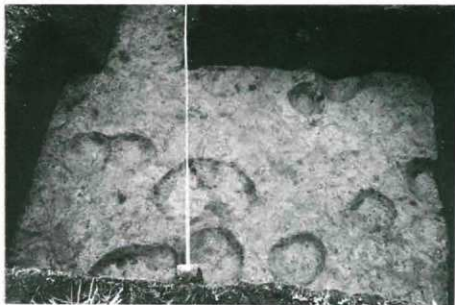
1. 42区全景（北から）



2. 44区全景（西から）



3. 45区全景（東から）



1. 46区全景（西から）



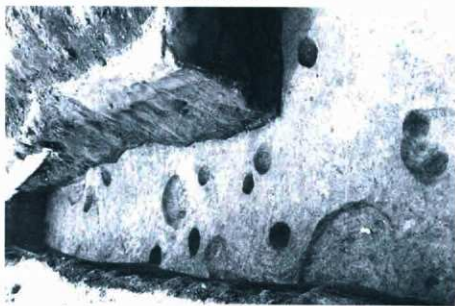
2. 48区全景（南から）



3. 53区全景（北から）



1. 55区全景（北から）



2. 56区全景（東から）



3. 56区全景（西から）



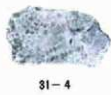
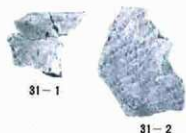
1. 58区全景 (西から)



2. 60区全景 (西から)



3. 62区全景 (東から)





32-1



32-2

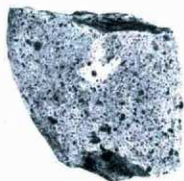


32-3

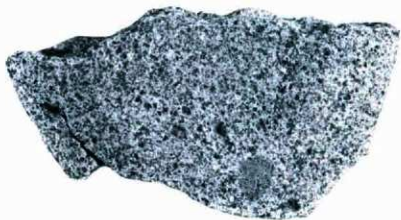


32-4

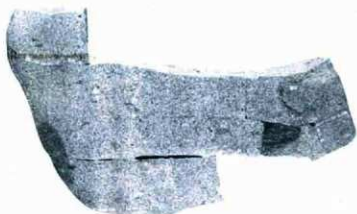




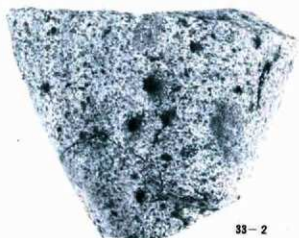
32-5



32-6



33-1



33-2



32-7

## 国分寺市文化財調査報告刊行目録

- 第1集 恋ヶ窪遺跡発掘調査概報 (昭和40年3月刊) 国分寺市文化財専門委員会編
- 第2集 恋ヶ窪堂址調査報告 (刊行年不明) 泉町麻守寺遺跡調査団編著
- 第3集 武蔵国分寺図譜 (昭和46年11月刊) 滝口宏編著
- 第4集 武蔵国分尼寺 (昭和49年4月刊) 滝口宏著
- 第5集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅰ (昭和51年6月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
- 第6集 " Ⅱ (昭和51年7月刊)
- 第7集 武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅰ (年報1974) (昭和54年3月刊)
- 第8集 恋ヶ窪遺跡Ⅰ (昭和54年3月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
- 第9集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅲ (昭和54年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
- 第10集 " Ⅳ (昭和55年2月刊)
- 第11集 恋ヶ窪遺跡Ⅱ (昭和55年10月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
- 第12集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅴ (昭和56年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
- 第13集 " Ⅵ (昭和57年3月刊)
- 第14集 恋ヶ窪遺跡Ⅲ (昭和57年3月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
- 第15集 武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅶ (昭和58年4月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
- 第16集 武蔵国分寺遺跡調査会年報Ⅱ (第1分冊 昭和59年3月刊、第2分冊 昭和57年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著
- 第17集 花沢東遺跡 (昭和60年3月刊) 恋ヶ窪遺跡調査団編著
- 第18集 武蔵国分寺跡遺物整理報告書 一昭和三十一年・三十三年度一 (昭和60年4月刊)  
日本考古学協会仏教遺跡調査特別委員会編
- 第19集 武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅷ (昭和61年3月刊) 武蔵国分寺遺跡調査団編著

### 国分寺市文化財調査報告 第20集 武蔵国分寺跡発掘調査概報Ⅹ

——北方地区・鉄道学園内下水道工事に伴う調査——

---



---

発行日	第一刷 昭和60年3月31日 第二刷 昭和61年3月31日
編著者	武蔵国分寺遺跡調査団 ◎ (団長 滝口 宏)
発行所	武蔵国分寺遺跡調査会 東京都国分寺市教育委員会 〒185 国分寺市戸倉1-6-1 TEL 0423-25-0111 (代表)
印刷所	信陽堂印刷株式会社

---



---